

歯学部ニュース

平成29年度第1号 (通算131号)

特集 歯学部学生の今



目次

入学を祝して	1
学部長 前田 健康・副病院長 小林 正治	
入学者のことば	3
歯学科1年 恩田 咲良	
歯学科1年 鈴木 気敏	
歯学科編入2年 五十嵐理沙	
口腔生命福祉学科1年 伊藤美樹子	
口腔生命福祉学科1年 堀江奈実佳	
口腔生命福祉学科編入3年 田村 鼓	
口腔生命福祉学専攻 博士前期課程1年 牧口 由依	
入学おめでとう	7
平成29年度 歯学部歯学科入学者名簿	
平成29年度 歯学部口腔生命福祉学科入学者名簿	
平成29年度 歯学部歯学科	
平成29年度 歯学部口腔生命福祉学科	
平成28年度(10月入学) 大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻 入学者名簿	
平成29年度 大学院医歯学総合研究科(口腔生命科学専攻博士課程) 入学者名簿	
平成29年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻(博士前期課程) 入学者名簿	
平成29年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻(博士後期課程) 入学者名簿	
特集 歯学部学生の今	9
歯学科 2年 割田 悠子/歯学科 2年 立石 光星/歯学科 3年 稲月 優世	
歯学科 3年 尾崎 紀子/歯学科 4年 横沢 明李/歯学科 4年 酒井 佑樹	
歯学科 4年 加藤 哲也/歯学科 5年 那須 優介/歯学科 5年 土橋 梓	
歯学科 5年 柴崎 慎司/歯学科 6年 高木 望/歯学科 6年 小野 喜樹	
歯学科 6年 齋藤 善彦/口腔生命福祉学科 2年 宇佐見早希	
口腔生命福祉学科 3年 宮澤帆乃花/口腔生命福祉学科 4年 浦澤 千晶	
連載:「大学院に行こう」	35
野々村絢子・干川 絵美・高橋 駿介	
教授に就任して	40
口腔生化学分野教授 照沼 美穂	
診療室・講座紹介	42
医歯学総合病院 地域保健医療推進部 副部長 鈴木 一郎	
看護・診療支援部便り	45
榎並美智子	
素顔拝見	47
米田 博行・山田友里恵・小田島あゆ子・黒澤 美絵	
総合診療部を経験して	51
白柏 麻里・中村 彬彦	
新入生合宿研修を終えて	53
片桐 涉	
歯学部運動会を終えて	55
荒木 望吏	
歯と口の健康フェアを終えて	57
小海 由佳	
部活動紹介	59
弓道部 大野 晴日・軽音楽部 大久保 光	
総務委員会だより	61
前田 健康	
第1回D ³ 研究交流会の報告	66
寺尾 豊	
花田晃治名誉教授 瑞宝中綬章を受章	68
齋藤 功	
学会受賞報告	70
久保田健彦・北見 公平・高橋 直紀・大川 純平・根津 新	
野上有紀子・児玉 泰光・阿部 遼・寺尾 豊	
新潟歯学会報告	84
船山 昭典	
同窓会だより	86
池田 順行・小松 康高・矢野 亜糸・田村 光・刈屋 功	
教職員異動	92
平成29年度歯学部内委員会	99
歯学部各種委員会	102

入学を祝して



入学を祝して

歯学部長 前田 健康

平成29年度新入生の皆さん、入学おめでとうございます。新潟大学歯学部に入学された皆さんに、新潟大学歯学部の教職員を代表して、心からお祝いと歓迎の意を表します。また保護者ならびにご家族の皆様の方々にも心からお慶び申し上げます。皆様方のご期待にそえるべく、新潟大学歯学部でその能力をさらに大きく伸ばすことができるよう、私たち教職員も全力を尽くしたいと思います。

本歯学部の強みとして、「問題解決能力を持った歯科医師養成と国内外の人材養成モデルの構築」、「口腔のQOL向上を目指した基礎・臨床研究」、「有病・高齢者への対応や歯科再生医療の実践」があげられています。私ども新潟大学歯学部の教育スタッフは、課題探求・問題解決能力の育成を重視し、その後に続く学習を通して、主体的に専門性を向上させる人材を養成することを目指しています。新潟大学歯学部の教育目標は、歯学・口腔保健福祉学の分野に貢献する専門職業人の育成で、この分野で活躍するためには国家試験に合格する必要がありますが、伝統的に本学ではいわゆる国家試験対策を行っていません。新潟大学歯学部では「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としていますので、教育への諸君の積極的な参加が求められます。

また、新潟はご存じの通り、1858年の日米修好通商条約により、函館・横浜・神戸・長崎とともに世界に向けて開港した海港都市で、進取の精神

に基づいた町です。現代はグローバル社会となり、ボーダーレスな環境の中での高等教育の発展が期待されています。グローバル人材の養成のかけ声の下、私ども新潟大学歯学部でも在学中から夏期、春期休暇を利用した学生の短期海外派遣を行い、毎年、約30名の学生がアジア各国、アメリカ、カナダ、スウェーデン等の諸外国に出かけています。是非、在学中にthe enterprising spirit of a port city opened to the worldを持って、海外に旅立ち、広い視野を持って下さい。一步を踏む出す勇気が必要で、自発的な気持ちが必要で、意義のある大学生活を送ることはできません。

再度強調しておきますが、新潟大学歯学部の教育の主役は、教員ではなくて、学生諸君であるということです。自ら努力して勉強しなければ、皆さんが望む成果を得ることができません。自己の目標達成のために、切磋琢磨し、たゆまぬ努力をお願いします。

勉強の話ばかり致しましたが、20代前後のこの時期、勉強ばかりだけでなく、クラブ活動、ボランティア活動などさまざまな社会経験をし、歯学部以外にも多くの友人を作り、教養のある社会人となるよう人間性を磨いてください。そして、社会の期待に応える医療人を目指し、これから充実した学生生活を過ごし、卒業時に、平成29年度新入生および保護者の皆様全員でまた朱鷺メッセで喜びを分かち合いたいと思っております。



歯学部入学おめでとう

新潟大学医歯学総合病院副院長 小林 正 治

歯学部歯学科ならびに口腔生命福祉学科に入学された平成29年度新入生の皆さん、入学おめでとうございます。難関を突破され、これからの歯科医療ならびに社会福祉を担うべく全国から集まってきた皆さんを心より歓迎いたします。

新潟大学医歯学総合病院は、特定機能病院として地域の中核的医療及び高度医療を担う基幹病院であるとともに、医療に従事する者を養成する教育機関でもあります。また、医科と歯科のより緊密な連携による全人的医療の提供と更なる医療ニーズの変化に的確に対応することを目的として、医学部附属病院と歯学部附属病院が統合して設置されました。本院の理念は、「生命と個人の尊厳を重んじ、質の高い医療を提供するとともに、人間性豊かな医療人を育成する」というものであります。

われわれは、優秀な医療人を養成したいと考え、様々なプログラムを用意し、全国モデルとなる充実した歯学教育を実施しています。皆さんも1年生の時から、早期臨床実習として病院で実際の医療の現場に立っていただきます。ここでは、医療人になるための心構えを形成し、医療の本質である「患者さんの視点に立つ」という意味を実感していただく目的があります。また、見学実習を通して、医療行為に必要な知識や技量を観察し、これからの基礎歯学・臨床歯学学習に対するモチベーションを向上させ、医療人としてのあるべき態度を肌で感じ取ってほしいと考えていま

す。

「木の長きを求める者は必ず根本を固くす」という言葉があります。これは、“大きな発展を願う者は、基礎をしっかりと固めなければならない”というたとえです。大学での生活は、皆さんがこれからの人生を生きていくための基礎を固める時期になります。是非、高い志を持って、学業に励んでいただきたいと思います。また、課外活動にも積極的に取り組んでください。サークル活動やボランティア活動など、人との交流が医療人に不可欠なコミュニケーション能力を養い、人間としての成長にも大きく寄与します。歯学部にとどまらず、幅広い多くの友人を作ってください。そして、仲間と大いに食べ、大いに飲み、大いに語らって幅広い教養を身につけ、魅力のある人になってください。また、挫折を恐れずに様々なことに挑戦していただきたいと思います。挫折は、挑戦した人だけが味わえるものであり、心を強く豊かにし、人間として成長させてくれます。信頼される歯科医師・歯科衛生士そして社会福祉士になるためにも、心も鍛えていただきたいと思います。

新潟は、豊かな自然に囲まれ、食材の豊富さやその美味しさは目を見張るものがあります。また、様々な伝統文化も根付いた魅力ある街でもあります。皆さんのこれからの活躍に期待するとともに、皆さんが新潟の地で楽しく充実した学生生活を送ってくれることを願っています。

入学者のことば

59名の仲間とともに

歯学科1年 恩田 咲良



楽しい時間ほど早く過ぎていってしまうとはよく言ったものです。4月に入学してからもうすでに3か月、私はこれまで大学1年生として学生生活を送ってきただけでなく、一人暮らし1年生、成人女性1年生（1浪したので）としても毎日を過ごしてきました。今までは母に任せっきりだった料理にもだんだん慣れ、少しずつ料理のレパートリーを増やしているところです。自炊は、食料の買い出しを含め、1人ですという経験があまりなかったので、大変さを感じつつも楽しいな、主婦みたいだなと思いながらやっています。20歳の誕生日に何から飲み始めたらいいのか、迷いながらお酒を選んだときの緊張と喜びもとても新鮮でした。しかしその後も何度か買いには行くのですが、1度も年齢確認をされたことがありません。それはそれで悲しいです。

私の話はこれくらいにして、歯学部1年生総勢60名の実態に迫ってみましょう。入学前のガイダンスの際、緊張しながらも友達作りを始めている姿が見られましたが、赤塚で行われた合宿で、その距離がぐんと縮まりました。それからなんといっても5月下旬の運動会。リレーで1位に輝いたことは、誰にとっても印象深い思い出となったはずです。あの時は応援している立場でも本当に盛り上がりました。それから、新潟大学特有の早期臨床実習。専門知識をほとんど持ち合わせていない状態で時には医療従事者の卵として、またある時は患者として実習を進めてきました。白衣姿で病院内を歩いていると、改めて新潟大学歯学部生としての誇りを感じます。実習の後歯学部生全員で授業を受けます。週に1回は旭町キャンパ

スで過ごすこととなるので、歯学科の仲間だけではなく、口腔生命福祉学科の仲間とも接することができ全体を通して充実した実習となっています。

受験生の時には、ライバルであった同級生。しかし今では、そしてこれからも、歯科医療に携わっていきたいという志を持った同志です。仲間との信頼関係を得ることは、同時により良い医療をしていくための架け橋となるはず。口腔生命福祉学科の仲間とは最高学年に違いこそありますが、それでもみんな意識を高めあう、みんな国家試験に打ち勝つ、この「59名」の仲間とともに支えあいながら、乗り越えていきたいです。先生方、これからもご指導のほどよろしくお願ひします。そして、みんなこれからもよろしく!!

入学者のことば

歯学科1年 鈴木 気敏



日増しに暑さが厳しくなって参りましたが、皆様ご清祥のことと拝察いたします。私たち1年が歯学部に入學してから早3か月が経過し、前期も残すところあと3週間となりました。

TOEICも終わり部活ではオールデンタルに向け本格的に練習が始まった部も多いと思います。慣れない一人暮らしや先生方や先輩方と新たに出会ったり、日々の課題に追われたりと毎日の刺激が多く、思い返せばあっという間の3か月間でした。

1年生は現在、五十嵐で他学部の生徒と教養課程の授業を聴講しています。特に高校で生物選択だった人は物理の授業内容やテストになかなか苦心している人も多いと思います。かく言う私もその一人です。また、こちらの五十嵐キャンパスで授業が受けられるのは今年いっぱい、全学の授業の雰囲気味わえるのもあと半年です。大学生活

にも大分慣れ、1年生は皆この貴重な総合大学特有の生活を十分に謳歌しているように感じます。

つい先日、新潟大学歯学部特有の早期臨床実習の病院実習が終了しました。私は身内に歯科医師がおらず、加えて今まで一度も歯科医院に行ったことがなかったので、実際に歯科医師の仕事に触れられるこの授業はとても貴重な体験となりました。特に患者役実習では自分が患者になり体験することで、実際の患者さんの気持ちに寄り添うことができました。また患者付き添い実習では、難しい症例の患者さんや歯科治療に対して苦手意識を持ってしまっている患者さんなど様々な患者さんと接することができ、将来歯科医になったとき自分がどのような患者さんに接するのかという参考になりました。この経験を忘れずに5年、6年での病院実習では患者さんの気持ちが理解できる実習生になりたいと思います。

最後になりますが、新潟大学の歯学部は歯学科と口腔生命福祉学科との人数を合わせても60人と他学部 비해、圧倒的に人数が少ない学部です。しかし、それがこの学部の強みだと思います。特に私たち1年は赤塚での合宿などで比較的早く仲が良くなったので、5月の運動会やテスト勉強、部活でのつながりによって、現在ではよりその団結力が強くなっていると感じます。これからも医歯学祭などのイベントや2年次以降の専門科目の勉強などの困難なこともあります。これからもこの団結力を強くし、一つ一つ乗り越えていきたいです。

入学者のことば

歯学科編入2年 五十嵐 理 沙



晴れて歯学科に編入し、歯科医師という夢への第一歩を踏み出して早3ヶ月が経ちました。当初は期待に胸を膨らませながらも、クラスになじめるだろうか、勉強についていけるだろうかなど不安も多くありました。ですが、今ではすっかりクラスのみならずとも打ち解け、勉強や課

題に追われながらも日々楽しく過ごしています。また、卓球部に入部し、同級生だけでなく先輩や後輩とのつながりもでき、より充実した学生生活を送ることができています。5月の運動会で、やや年上のお姉さんは張り切って走って肉離れを起こしそうになりましたが… 苦笑

私は食や栄養への興味から、以前の大学では栄養学を専攻し、管理栄養士の免許を取得しました。そして、その後大学院に進学し、生活習慣病のリスク因子に関する疫学研究を行ってきました。編入を決意したきっかけは、これまで学んだ栄養学との関わりから、肥満や糖尿病などともに以前から歯科の分野に興味があったことや自らの歯科矯正の経験、大学院で臨床家が多くいる環境で研究をしてきたこと、姉が歯科医師であることなどから、自分も歯科医師になりたいという思いが徐々に強くなっていったことです。編入は非常に狭き門であるため、まさか自分が合格できるとは正直思ってもみなかったのですが、合格させていただいたことをとてもうれしく思っています。

さまざまな回り道をしてきましたが、そのおかげで合格を手にすることができ、本当に自分がやりたかったことに出逢えた気がします。そして、およそあと5年で非常に長い学生生活にも終止符を打つこととなります。私には将来、歯科医師として診療する傍ら研究もし、時には管理栄養士として栄養指導や食育、料理教室などにも携わりたいという欲張りな夢があります。これまでの経験を最大限に生かし、患者さんから信頼されるよい歯科医師になれるよう、まずは国家試験に合格し、笑顔で卒業することを目標にがんばっていきたいと思います。

入学者のことば

口腔生命福祉学科1年 伊藤 美樹子

新潟大学に入学して約3か月がたちました。大学では想像していたよりも自分の判断で行動することが大切で、入学したばかりのころは不安でいっぱいでしたが今は大学生活にも慣れて毎日楽しく過ごしています。

私が口腔生命福祉学科を目指したのは、治療で

不安になっていた私に優しく声をかけて安心させてくれた歯科衛生士さんの存在があったからです。私は幼いころから新潟大学医歯学総合病院に一人の患者として通っています。幼いころの私は治療をとて嫌がり、歯の治療なのに口を頑なに開けなかったり、暴れたりしてとにかく治療を拒んでいました。そんな時に、歯科衛生士の方が優しく話しかけてくれたことで「この人は自分のことを理解してくれている」と嬉しく思ったことを今でも覚えています。私もそのように治療を嫌がる子供や不安になっている患者さんの気持ちを理解し、その人に合わせたコミュニケーションをとることができる歯科衛生士になりたいと思い、口腔生命福祉学科に入学しました。この夢を実現できるようにこれから4年間しっかりと学び、たくさんの人と関わってコミュニケーション能力を高めていきたいです。

私たち1年生は毎週金曜日に旭町キャンパスで患者付き添い実習、患者役実習、治療見学実習をしています。入学するまで、患者として何気なく歩いていた病院内や診察室で白衣やユニフォームを着て実習をすることが最初のころはとても不思議でした。しかし、回を重ねるごとに将来医療にかかわるものとしての自覚が少しずつ芽生え、今では言動に気を付けて実習をすることができています。2年生からは専門的な学習や実習が始まるので今のこの気持ちを忘れずに来年からも頑張りたいと思います。

学ぶことはもちろん大切ですが、新しくできた友達とたくさん遊び、たくさんの思い出を作って後悔のない大学生活を送っていきたいです。

入学者の言葉

口腔生命福祉学科1年 堀江 奈実佳

私たちが入学して、早くも3カ月が経とうとしています。3月に高校の友達や先輩、恩師の方々に別れを告げ、4月に新しい環境で学ぶという不安と期待が織り交ざる心情の中で入学式を迎えたことを今でも鮮烈に覚えています。親元を離れ、遠い地での一人暮らし。最初は試行錯誤の、手探りの状態で始めて、先行きが不安でしかありませ

んでしたが、ようやく軌道に乗り、慣れてきたように感じます。炊事や洗濯など今まで親がやってくれていた家事を全て一人でやってみて初めて、親のありがたさと自立の難しさを痛感しました。

色々なことがあり、振り返ればこの3カ月は本当にあっという間に過ぎていった3カ月でした。やっと自分の中で余裕ができ、最近では大学に入ったら絶対にやりたいと思っていた部活やサークル活動に精力的に取り組んでいます。先輩方はとても優しい人ばかりで、部活やサークル活動以外の悩みにも親身になってアドバイスをくれるので、本当に感謝してもしきれません。

入学してすぐ、毎週金曜日に早期臨床研修が始まり、白衣を着て実際の現場を見ることは私たちにとって、これから医療従事者になるのだという気持ちを高めてくれました。専門的な知識は何もないため、毎回の研修で学ぶことが新鮮で、驚くことばかりでした。実際に患者さんと関わったり、現場の仕事を見学させてもらったり、患者さんになって治療してもらったり、この学部でしかない経験を1年生の早い段階で積めることは本当に有意義であると思います。

歯学部は60人程度と比較的少人数の学部ですが、お互いに協力しあって大学生活を過ごしていきたいです。まだまだ始まったばかりで、これから楽しいことだけでなく辛いこと、苦しいことも待っていると思いますが、歯学部みんなで乗り越え、かけがえのない、素晴らしい大学生活にしていきたいです。

入学生の言葉

口腔生命福祉学科編入3年 田村 鼓

新潟大学に入学して3カ月が経ちました。私は短大に入学し歯科衛生士免許を得て、4月に口腔生命福祉学科に編入しました。もともと、医療・福祉に興味があり歯科衛生士を目指しましたが、特別養護老人ホームでの実習を経験し、高齢者福祉についてもっと深く学びたいと考え新潟大学への入学を決めました。

いままで福祉＝高齢者というイメージが強かったのですが高齢者の分野以外にも児童、障がい

者、社会保障などたくさんの分野があるのだと知りました。講義は学生自ら問題を見つけ、グループディスカッションを行い、問題解決をするPBL形式が多くあります。これまで経験したことのないスタイルの講義のため最初はとて戸惑いました。調べ方が十分でなかったり、意見を言うときや発表の際に緊張しながら毎回課題に取り組んでいます。それでも、PBLグループのメンバーと一緒に話し合ったりまとめをしたりと初めて経験する学生主体の講義形式は私にはとても新鮮で毎回楽しいです。まだまだ不十分な点が多いですが社会に出たときにこの経験を生かせるよう努力していきたいと思います。

私は専門科目以外にも心理学や英語などの教養科目も受講しています。特に苦手な英語に苦戦しています。高校での英語は受動的に先生の話聞いている形式が多く、短大ではほとんど英語は勉強しませんでした。そのため、英語で論文を書いたり自分の意見を述べるなど難しく感じています。今は、3年次編入生6人で行うディベートの準備をしています。英語で行うディベートに今から緊張していますがディベートが成功するようしっかり準備をして当日に臨みたいと思います。

この3カ月間で私は受動的に講義を受けるのではなく、自分で課題を探し考える事の大切さを痛感しました。2年間と短い学生生活です。恵まれた環境で勉強できることに感謝し、有意義で充実した大学生活を送りたいと思います。

入学者のこぼ

口腔生命福祉学専攻 博士前期課程1年
牧口由依

この春、口腔生命福祉学科を卒業し、新潟大学医歯学総合病院で歯科衛生士として働きながら大学院で学んでいます。なぜか歯学部ニュースを書くのは学部生の頃から数えて4回目になります。文才があるわけでもないのに何回も登場して申し訳ありません。「卒業にあたり」というテーマで執筆させていただいた前回から早半年、歯学部ニュースとは縁がなくなると考えていましたが、こんなにすぐに執筆させていただくことになる

は思いませんでした。恐縮ですが、読んでいただくと幸いです。

私にとって、大学院は勉強・研究が好きの人が行くところであると思っていました。勉強があまり好きではない私が大学院に入学することになるとは、1年前は全く考えていませんでした。大学病院に就職が決まり、大学院に行かないのはもったいないかもしれないという考え方にだんだんシフトしていき、入学することを決意しました。今は終業後に講義を受けたり、レポートをこなす毎日であるため、(こんなことを書いたら怒られるかもしれませんが)正直まだあまりモチベーションが上がっていません。しかし先日、研究を担当していただく先生方と研究についてお話させていただいたときに、具体的な研究のイメージが見えてきて、面倒に思っていた研究が少し楽しみになりました。

先日、口腔生命福祉学科卒業生の集いが開催され、県内外から1~10期生が集まりました。このような機会、節目の年に恵まれたことに感謝しています。久しぶりに会う同期と話す中で、違う部署だけど同じ病院の歯科衛生士、県外の行政で活躍する社会福祉士、毎日勉強しながら働くMRなど、違う分野であれどそれぞれ頑張っているのだと感じました。そんな同期を見て励まされたし、私も頑張ろうと思えました。

大学院に通いながら新社会人として仕事を始めて、3ヶ月が経ちましたが、ようやく新しい生活にも慣れてきました。2年後、またその先もこの道を選んでよかったと思えるように、息抜きもしながら仕事も研究も有意義なものにしていきたいです。



2年生の今

歯学科2年 割田 悠子

私たち2年生は、編入生5人を仲間に入れて歯学部生としての新たなスタートを切った。初めは編入生との間に見えない壁があったが、編入生歓迎会（という名の飲み会）を経て打ち解け、5人とも今ではなくてはならない大切なクラスメートである。

1年生の時と比べて大きく変わったことは、まず、講義を受ける場所が五十嵐キャンパスから旭町キャンパスに移ったことである。それと共に講義内容も教養科目から専門科目へと変わった。5月に行われた生理学の試験前は、専門科目初の試験ということもあり皆が必至だった。1年生の時はあまり話すことがなかった者同士が男女問わず教え合う光景も見られ、頼もしく感じた。今、一部の科目では夏休み前の中間試験の時期に入り、

毎週のように試験がある。それに加え今年度から新カリキュラムとなり、歯学スタディ・スキルズⅡという科目が増え、現代社会と歯科医療についてのレポート提出も迫っている。まだ基礎を学んでいる段階の2年生にとって難しいテーマではあるが、歯科医師を目指す私たちが目を背けてはいけない課題が散在していることを知る良い機会となっている。ただ、試験勉強とレポートを同時進行でやらなければならない、正直逃げ出したい。しかし、白衣や緑衣をまとった先輩方のたくましい姿を目にするたび、皆が乗り越えてきた道なのだから、と自分を奮い立たせている。

余談ではあるが、旭町キャンパスへ移ってきて変わったことは他にもある。それは、五十嵐キャンパスにいた頃は当たり前のように利用していた



編入生歓迎会

学食がないことだ。そのため、お弁当を作ってくる人や、ローソン通いに徹する人など様々いる。恥ずかしながら、今のところ私は後者なので、ローソンには大変お世話になっている。勉強の合間に小腹がすいた時、すぐ近くにコンビニがあるのは学生にとって心強い。

2年生になり後輩ができたことで、部活での立ち位置も大きく変わった。教えてもらうばかりであった私たちが今度は教える側にもまわったり、

新入生歓迎会の幹事を担当したり、視野が広がったと同時に先輩方の偉大さを再認識した。実習などで忙しいにも関わらず、一切疲れを見せず集中して部活に励んでいる先輩の姿には、いつも刺激を受ける。勉強についてもアドバイスをくださり、とても頼りがいのある先輩ばかりである。

これからも、恵まれた環境で学んでいることを忘れずに精進していきたいと思う。



二年生の今

歯学科2年 立石光星

ついこの間入学したかと思ったら、歯科医師になるという自覚も薄いまま、いつの間にか二年生になってキャンパスも病院がある旭町に移ってありました。白衣や緑衣を着て、実習に向かう先輩方、急に始まった専門性の高い科目、迫り来る課題と試験。焦りを感じると共に、しかしそんな毎日をどこか楽しいと思う自分が確かにいます。そんな自分を裏切らないよう、しっかりとした知識をつけたいです。

ですが実は、そんな知識が自分の前には壁となって立ちはだかっているように感じます。歯科理工、微生物、生理学、生化学、解剖学。専門的な知識をつけるための下地となる基礎的な内容は覚えなければいけない情報の海。実習は楽しそうだけど、座学なんて本当に必要？…そんな風に思わず現実逃避をしたくなります。しかし、授業の

中でたまに聞こえて来る国家試験とCBTという言葉が、いやでも将来必要な知識なのだと教えてきます。そうでなくとも、たった数年後、先輩たちと同じように実習が始まった時、知識がなかった所為で、治療を間違える、そんなことがあってはならないのは分かりきっています。それだけの責任が必要なのです。今学んでいる内容は、絶対に数年後、いや一生使うことになるのです。こんな風に考えるということは、少しは自分の中に将来歯科医師免許を持つものとしての自覚が芽生えてきたと思ってもいいのでしょうか。

個人的な話はこの辺にして、二年生の近況報告をしてみたいと思います。ふと思ったのは部活でのポスト。多くの人が、去年お客さん待遇だった部活で、今は、幹部見習いとして仕事をして（させられて？教えられて？）いるように見えます。



寄付金お願いハガキの宛名書きが一番辛そうです。お客さんではない中で1番の下っ端ですから、これも仕方ないのかもしれませんが。しかし部活を通しての先生や先輩方との交流は、社会的だけでなく勉学的に欠かせないものですし、将来部活を引っ張る責任もあります。みんな頑張り。さて他に言いたいことと言えば、おそらく、大学生になって初めて受けるであろう、口頭試問という形式の試験でしょうか。大学で初めてレポートを

経験した人は去年沢山いたでしょうが、今回は口頭試問です。優しいことに合格するまで何度でも、挑戦できるものだったので、無事全員が合格できたようです。初めての口頭試問で、各自どう思ったのでしょうか。私は楽しかったです。

初めてと責任と自覚と。いろいろなことに揺さぶられる毎日ですが、おそらく二年生皆、少なくとも歯学部に来たんだという実感と共に楽しく過ごしていると思います。



3年生の今

歯学科3年 稲月優世

私たち51期生が入学してから早くも2年が経って3年生となり、あっという間に3か月が過ぎました。1年生だった当時は、7月ともなると五十嵐キャンパスでの大学生活にも慣れ、テストの準備をしながら初めてのオールデンタルを心待ちにしていた頃でしょうか。「旭町に通う先輩方の勉強は大変そう」と思っていたのも束の間、気づけば自分が解剖学実習をしている学年です。

新潟大学歯学部歯学科の3年生の科目と言えばやはり人体解剖学実習でしょうか。私がこの歯学部ニュースの原稿を書いている時点で解剖学実習は全4回の口頭試問を終え、残すところあと1回となりました。今でも1回目の実習の緊張感は強烈に覚えています。それまで漠然としていた緊張が、一礼して解剖学実習室に入った瞬間にピンと張り詰めたものに変わるのがわかりました。火曜

日と木曜日の週2回の解剖学実習はとても密度の濃い、充実した時間だったと思います。それと同時に、解剖学に関しては2年生の講義で学習済みですが、この教科書で学んだ2次元的な知識を実際の御遺体を前にして3次元的な知識へと昇華させていくこと、知識という点を線でつなげていくことの難しさを日々感じていました。解剖学実習は先輩方から聞いていた通り、体力的にも精神的にもハードなものでした。しかし、その分歯学科3年生というクラスが一体となってこの実習に真面目に取り組み、将来歯科医師という医療人になる学生として大きく成長できたのではないかと思います。このように実習を行い、成長できたのはインストラクターをしてくださった先生方、そして御献体に協力してくださった方やそのご遺族のおかげです。この感謝の気持ちを忘れずにこれが



らも学習を続けるとともに、将来必ずこの経験・知識を生かしていくことが何よりの恩返しとなるのではないかと私は感じています。

解剖学をはじめとした授業に毎日取り組むと同時に、部活動の方もだんだんと忙しさを増してきました。弓道部は後輩もどんどん増え、オールデントルを終えるといよいよ3年生が幹部学年とな

ります。今まで以上に勉学と部活動の両立を意識して時には息抜きしつつ、協力して部活動の運営ができればと思います。

医療を学ぶ学生として大きな成長のきっかけとなる3年生、まだまだ学ぶべきことはたくさん残っていますが徐々に将来を見据えて一つ一つ丁寧に勉学に励んでいきたいと思っています。



3年生になって

歯学科3年 尾崎紀子

2年生の頃は「来年から解剖実習かぁ。」と、3年生になったら始まる実習のことで不安を抱えていました。しかし、この原稿が歯学部ニュースに掲載するには実習は無事終わっていることでしょう。ここでは‘歯学部生の今’について語るのですが、序盤では3年生前期の中で印象深かった解剖実習について語りたと思います。解剖実習は4～5人が一組になって実習を行います。そのため自分の知識が足りなければ他の班員に迷惑をかけてしまいます。従って予習が大切で、自然と家庭学習の時間が増え、勉強の習慣が身につきました。実習開始当初はピンセットの持ち方でさえ先生から注意を受けたことを覚えています。第1回目の口頭試問では緊張による手の震えからピンセットが尋常ではない程、動きました。実習が終盤に差し掛かるとある程度の緊張はありましたが、程よい緊張の中、実習を行うことができました。今では最終口頭試問が近づいていながらも、この原稿を書き上げることができる程、微小では

ありますが、心に余裕ができました。解剖実習の良いところは今まで2次元で学んでいた内容を3次元で、さらに間近で学べるところです。これにより立体的に覚えることができ、また実習中に起きたエピソードと共に覚えることができると感じました。

学ぶことが増えると、今まで点として見えていたものが線として見え始めます。ある分野を勉強していく上で、違う分野の知識が必要になった時に2つの分野の間に繋がりが生まれます。その繋がりを増やしていくことで暗記に頼り切らない勉強ができるのではないかと思います。一方で学ぶことが増えると、それだけ勉強時間も長くなります。その中で休息をどれだけ上手に取り入れるかということがこれから学年を上がるごとに大切になっていくのではないのでしょうか。私は3年生の頃から休息の取り方を覚えておくと良いと思います。なぜなら今のうちから休息の取り方を覚えなければ、忙しい学年になった時に気分転換した



くても勉強しなければ不安で休憩できないことになるからです。確かにテストが近い時に遊びに行ったとしても罪悪感から思い切り遊べないと思うかもしれません。しかし遊びに行かないにしても少し勉強から離れる時間がなければ、テスト期間が来るたびに体力的にも精神的にも疲弊してしまうと感じました。

私が入部している部活動では3年生が幹部になります。従って私たちが後輩を引っ張っていかなければならないという責任感が少しずつ芽生え始

めました。自分が幹部になってようやく先輩方の大変さを本当の意味で知ることができると思います。幹部になることでやらなければならないことが増えますが、部員と共に乗り越えていきたいと思っています。

最後になりましたが、これからもっと勉強、部活動共に忙しくなっていくと思いますが、毎日を充実させながら残りの3年間過ごしていきたいです。



折り返しを迎えて

歯学科4年 横 沢 明 李

6年間を折り返し、4年生になった私たち歯学科50期生。思い返せばあっという間の3年間でした。のびのびとキャンパスライフを満喫していた1年生。専門科目に目を輝かせていたけれど、1か月後には死んだ目をしていた2年生。解剖実習の前期、テスト山盛りで記憶がない後期を過ごした3年生。そして現在4年生。いい意味でも悪い意味でも大学生活に慣れました。学年的には中堅どころ、部活でも幹部学年と、要になる1年です。勉強はもちろん、それ以外でも部活や県人会などたくさんの事に追われ、めまぐるしい日々を過ごしています。週2回は、朝から白衣を着て気が付けばもう夕方。「どうせ学校に着いたらすぐ着替えてマスクもするんだから、ジャージすっぴんでいいじゃん！」なんて言っていますが、それを実践している人は今のところまだいません。まだそ

こは守りたい4年生女子たちなのでした（笑）講義を聞いている90分は長い（たまに辛い）と感じていましたが、実習の90分は一瞬。今まで講義で学んできた一つ一つの知識がつながって線になって、形になってきている感覚に毎回わくわくしています。同時に自分の知識の浅さ、今までの講義の重要性や必要性を強く感じます。

今年から冠ブリッジ実習では6年生が数人ずつ来てくれています。気さくに話しかけてくれ、先生に聞くのが恥ずかしいような質問にも答えてくれ安心感があります。実習書や教科書には載っていないコツを教えてくださいがなよりの学びです。6年生は、知識、臨床的な手技、人との接し方など全てにおいて「先輩」というより「歯医者」のようでした。私たちのここからの半分の時間は、よりスピードアップして「学生」から「歯



医者」になっていくのかもしれませんが。

この学年には、ひとつ問題があります。実習ではたくさんの歯科材料や器具を使っていますが、私たちの学年は先生も驚くほど材料を使う学年なのです。クラス購入した材料をすぐに使い切ってしまう、その度に追加に追加を重ね集金しています。実際に臨床の現場で使用されているものと同じものを使うため、材料のお値段もお高め。それに加えて、実習書代、外注代、追い打ちをかけるB型肝炎ワクチン代…春から猛スピードでお金が飛んでいっています。しかし、この金欠があった

からこそ、運動会で「エグザバイトを買う」べく、総合2位になれたのかもしれませんが。これは凄まじいモチベーションです。ただこれは言いたい、みなさん材料は大切に使いましょうね。幹事からの切実なお願いです。(笑)

こんな4年生ですが、たくさんの先生方にご迷惑とご心配をかけ、そして愛情を受けながら日々過ごしています。このクラスの取柄である「元気」と「仲の良さ」を大切にしながら、これからの残り2年と半年を全員で駆け抜けていきます。



歯学部生の今

歯学科4年 酒井 佑 樹

私たち歯学科50期生はこの春見事に4年生になることができ、ついに折り返し地点に立つことになりました。五十嵐から早期臨床実習のために病院に行っていた1年生の頃。今では、いつの間にか挨拶をしてくれる後輩ができ、部活で共にバカ騒ぎをしていた先輩が緑衣を着て引き締まった顔で病院に向かっていく姿を見て、ふと時の流れを感じるとともに、もう来年には迫ってくる「臨床の場」、というものに対し恐怖や不安にかられつつも、ここまでやって来たのだ、という達成感に似たものを感じています。

4年生になって、3年次までの授業に比べ実習の占めるウェイトが増えてきました。前期に入り、クラウンブリッジや全部床義歯をはじめ様々な実習が始まりました。今までの座学がメインの毎日、実習が中心となって回るようになり、白衣を着て実習室に向かう姿が多くなりました。最初はそれこそ意気揚々とむかっていたのですが、毎回与えられる課題を達成することは自分が想像

していた以上に大変でした。

実習が始まると、自分の得意さ、不得意さというものが分かってくるようになりました。自分は残念ながら後者で、周りの友達が自分より早く、正確なプロダクトを仕上げていく姿をみて、なぜこんなに差が開いてしまうのだろうかと焦りを感じるが多くなりました。そんな時に、顧問の小野先生に「実習というかそういうものがうまいやつは自分がやっていること、次にやらなければいけないことをしっかり理解しているやつが多いんだよ。」というお言葉をかけていただきました。その時私は、目の前の作業に必死になっていて、なぜこの作業・手順を行うのか、という理解を置いてきてしまっていたという事に気づかされました。作業をこなすだけではなく、なぜ今この作業を行うのか、この方法はどのような時に用いるのか、と考えながら実習をすることが求められているのではないかと考えるようになりました。焦りは必ず感じるものであるけれども、それを受け入



れしっかり臨んでいきたいと思ひます。

私も部活の幹部となり、主将として部に参加するようになりまひた。様々な人がいる部活を協力してまとめていく大変さや、うまくいかないことを多く感じますが、その度に助けてくれる同期や先輩、後輩に恵まれ、この部活に入ってよかつたなと感じさせられます。主将として最後の目標は、お世話になつた尊敬する先輩の最後の大会を有終の美で飾り、入部してくれた後輩にこの部活

の楽しさを伝える事です。この歯学部ニュースが手元に届く頃には少しでも目標を達成できていると嬉しいです。

教室に戻ると4年も一緒にいるクラスメイトがいて、そこには不思議な安心感があります。昨年には愉快的な編入生も増え、より賑やかになつた50期生の仲間とともに、これから立ち向かわなければならぬCBTや国試に向けて、適度に息抜きをしながらも頑張っていきたいと思ひます。



晴れて4年生

歯学科4年 加藤 哲也

恐れていた原稿依頼が来てしまいました。丁重にお断りしようかと思いましたが、原稿を執筆するという事は激動の3年生を乗り越えて無事に進級できた証なので今回は引き受けることにします。さて、3年生の頃は先輩方からしばしば「一番大変なのは3年生だよ。4年生になれば余裕ができるから」と言われてきました。この原稿は7月に執筆しているのですが、4年生になって3か月間経って思うことは「4年生の方がよっぽど大変だ」ということです。「4年生は余裕がある」このような都市伝説が脈々と受け継がれているのは、3年生に頑張ってもらいたいという先輩の愛情なのだと思うことにします。私も来年以降、後輩にはそう言います。

さて、4年生の授業は来年以降の臨床実習を意識した実習がメインとなるため、3年生までは週に一度位しか通さなかった白衣の袖にほぼ毎日袖を通してきているような気がします。大きな工具箱を抱えて実習室に向かう風景も日々の風物詩です。ここでいくつかの実習を紹介します。まずは、歯冠修復学です。いわゆるかぶせ物(クラウン)を製作します。今年からの新たな試みとしてSGD(スモールグループディスカッション)と6年生の実習参加があります。SGDでは、予め先生に提示された問題を各自考えてきて、当日実習テーブルごとに意見を出し合ってプロダクトを完成させます。最後に指名されたグループが発表します。大変ですが、非常に力が付きます。6年生の実習参加では、毎回4、5名の6年生が私達の実習のTAとして参加して下さいます。学生に近い目線からアドバイスをして下さり、本当に感謝しています。以上の2つは、来年以降も続けていくべきだと思います。次に欠損補綴学です。いわゆる入れ歯を製作する実習です。普段何気なく見ている義歯を一つ作るのに多くの手間と時間がかか

ることが身に染みてわかりました。また、実習以外の座学においても臨床実習を意識したものとなっています。先生方が「ここ特に国試に出題されやすいよ」とアドバイスをして下さる機会や、実際の国家試験の問題を解説して下さいすることも多くなったような気がします。

日常生活についてですが、4年生はみな仲が良くまとまっていると思います。先日は私の誕生祭と称して友人(男性)がおいしい中華料理とケーキ(写真参照)を作ってくれました。また、解剖実習班で今でも飲み会をすることもあり、解剖学



友人の手作り中華料理



誕生ケーキ

実習が終わって1年たった今でも班のつながりを認識でき、とても良い仲間恵まれたと思います。それと、8月にはSV（ショートビジット）を利用してタイのプリンスオブソクラ大学に行く予定です。しっかり楽しんで……いやしっかり勉強してきます。

最後に、入学当初はあれほど先のことだと思っていた臨床実習もこの原稿が歯学部ニュースに掲載される頃には1年を切っています。先生方におかれましては、どうぞ温かい目で私達4年生を見守ってください。



5年生の今

歯学科5年 那須優介

初めまして。歯学科5年の那須優介です。私が5年生になってからの学生生活について紹介させていただきます。

まず初めに、3月に日本学生支援機構による海外留学支援制度（SSSV）の留学プログラムに参加しました。私のクラスからは10名ほどが各地に派遣され、私はスウェーデンのマルメ大学に同期2名、後輩1名と共に約2週間留学させていただきました。マルメ大学はPBLを歯科大学で初めて導入したことで有名です。PBLとは、与えられた症例についてグループで討論し、自主学習によって問題を解決する学習方法で、マルメ大学では入学から卒業までPBLを軸とした教育カリキュラムが組まれています。その代わりに、驚くべきことに講義がほとんどなく、学生は自分で全て勉強する必要があるそうです。マルメの学生のこうした主体性やモチベーションの高さは非常に刺激的でした。

5年生前期のカリキュラムはこれまでと雰囲気が変わり、いよいよ後期から始まる臨床実習を意識したものとなっています。その主な内容としてPBLやポリクリ（臨床予備実習）があります。PBLでは、「目的意識をもって学ぶ」ことの重要性を実感しています。問題解決のために思考し、調べた結果を周りに説明するというプロセスを経て得た知識は、ただ講義で受け身になって得た知識よりも、定着が早く「使える」知識となります。ポリクリでは、臨床実習に上がるうえで必要な知識や手技を学びます。学生同士で行う相互実習では、実際に人の口の中で処置をすることで初めて

見えてくるものや理解できることがあり、緊張感があるものの楽しく非常に興味深いです。先生が学生にデモンストレーションをしてくださるのですが、班に男子が私と窪田くんの2名しかいないため毎回どちらかが犠牲となり、班の女子たちに口の中を覗き込まれます。ほとんどデモ係と化している私達は、おかげで張り切って歯磨きをするようになりました。（笑）

5年生になり部活を引退する人もいれば、まだまだ現役の人もいます。私はサッカー部に所属していますが、引退は6年生の夏です。今後、実習などでだんだん練習に出られなくなると思うと残念ですが、後輩たちに負けずに最後まで全力で走りぬきたいと思います。

最後に、こうした恵まれた環境を与えてくださっている周りの方々への感謝の気持ちを忘れずに、残り4分の1となった学生生活を過ごしていきたいです。



部活の仲間たちと（筆者右端）

5年生の今

歯学科5年 土橋 梓

吹雪で傘もともに差せないような、大嫌いな新潟の冬を4回越え、ついに私たちも5年生。ついこの前まで五十嵐のキャンパスに通ったり、人体解剖実習であくせくしていたはずなのに、いつの間にか「緑衣」を着る学年になっていました。

5年生前期の学校生活では大きく3つに分かれます。まず1つ目は、総合模型実習。これは様々な疾患が起きている上下顎の人工模型に対して、自分で治療計画を立て、治療していくという実習です。クラス全員に全く同じ顎模型を配布されますが、これが正解という計画はありません。そして丁寧に計画を進めていく人もいれば、要領よく進める人もいて、個性が出ます。途中までは楽しく実習を進められるのですが、夏休みが近づくにつれて実習時間内に治療が終えられるのかという問題に直面し、自分の計画の効率の良さと、実習の手際の良さが問われます。

2つ目は、ポリクリ（臨床予備実習）。10月から始まる臨床実習にむけて各診療科を少人数のグループで回っていく実習です。今までは模型に対して行っていた実習も、ポリクリでは学生同士で実習をします。実際に人の口で行うと思っていたように出来なかったり、痛みを感じたりと、これまで気づかなかったことにも気を配らなければなりません。最初にも述べましたが、ポリクリが始まると緑衣という、薄緑色の診療着を着ます。この緑衣を着ると患者様を治療させていただく責任感と緊張感が湧き、自然と身が引き締まります。

3つ目は、CBT・OSCE。臨床実習に出る前の共用試験です。これに合格しなければ10月から

臨床実習に出られません。5年の中で最大の山場かもしれません。国家試験結果と相関があるといわれているCBTは今年から合格ラインが上がり、より一層頑張らなければなりません。この原稿を書いている今も頭の中はCBTのことです。

このように学校生活は忙しいものの、4月にはクラスでサントピアワールドと温泉旅行に行き、歯学部運動会では幹部学年でありながら優勝をしたり、関屋浜でバーベキューや花火をして遊んだり、クラスでいろいろなイベントをしています。

学生生活も早いもので残り1年半。この時間をどのように過ごすかで自分の将来が見えてくるし、決まるような気がします。今自分が興味のある科や、あまり好きではない科もありますが、主観で決めつけず広い視野を持って臨床実習で多くのことを吸収したいと思います。そしてこのクラスで過ごせる時間も限られてきました。楽しい時間を過ごしつつ、これから始まる臨床実習も皆で乗り越えていきたいと思っています。



歯学部生の今

歯学科5年 柴 崎 慎 司

『暗記はヒューマンエラーに繋がる』

前の大学の教官から研究を行うにあたり、口酸っぱく言われ続けた言葉である。自然系学部らしい理由であるが、曖昧な記憶に頼った実験や業務は生産性をはじめ莫大な損失を生む。将来、企業や研究機関で業務を遂行する際、損失を生むような人材では困るという配慮から生まれた言葉であると考えている。何事にも言えることだが、ただ闇雲にすべてを丸暗記したところできちんと記憶することは出来ず、ちょっとした勘違いからすぐに間違いが生まれる。ラボスケールの少量であっても間違いから生じる損失は大きいことから、必要な事柄は常に理解して取り組むように気をつけるようになった。

しかし、今の歯学部生活では先述の言葉の意味を忘れていたように感じる。

歯学部で学ぶ事柄は膨大であり、丸暗記する部分も膨大であると考えていたためである。考査では暗記でも覚えられた内容も、CBTを前にしてあまり理解できていない事がわかった。そのような時、ふと講義や実習をされる先生方の指導を思い出してみると、診断や治療を行う上で必要な事

柄をきちんと理解されている事に気がついた。その中に、「ただ暗記している」事柄は無い。基礎分野や臨床分野、〇〇学といった垣根は存在しておらず、様々な分野を統合して理解し、抽出して私達に解りやすく教えてくださっている。CBTに関係なく、先生方の授業を振り返り教科書や講義資料を復習することが、必要な事柄を理解する上で一番の近道であると痛感した。CBTを突破し、10月からの臨床実習において臆することが無いよう、様々な事柄をきちんと理解していきたい。

編入生として歯学部に入學して早2年と半年近く。気がついたら半分以上も時間が経過していたことに驚きを隠せない。ということは、それだけ充実している毎日を過ごすことが出来ているのだと思う。「月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり」という言葉の通り、月日が過ぎていくのはあっという間である。なかなか旅の道が捗らないと書かれているが、人生という道もなかなか捗らないと思う。少しでも道が捗るように、旅人のような日々を無駄にしないように、さらに充実した毎日を過ごしていきたい。

歯学部生の今

歯学科6年 高木 望

七夕が終わり、学生最後の夏がやってきました。去年の10月から始まった臨床実習も残りわずかとなり、今まで学んできたことを自分のものにするのと同時に日々新しいことを吸収する。私たち6年生はそんな毎日を送っています。

七夕と言えば彦星と織姫に願い事をするのが一般的ですが、6年生の願いは「国家試験合格」、これ以外ないでしょう。そして、流れ星にも願い事をすると叶うと言われていています。そのルールは流れ星が消えるまでに願い事を3回言うこと。想像してみてください。夜空を見上げていたらたまたま流れ星が。お願いごとをしなければ。でも何を願いましょう。考えている暇はありません。流れ星は一瞬で消えてしまいます。焦った時、人は何を願うのでしょうか？家族の健康？将来の成功？目標の達成？平穏な日々？きっと、いつも考えている願いを口にするのだと思います。いつも考えている願い。いつでも考えている、強く叶えたいと思っている願い。そんな強い願いがある人は流れ星が消えるまでに願い事を3回言うことができるでしょう。曖昧な願いしかない人は気が付いたら流れ星が消えているでしょう。だから、流れ星が消えるまでに3回願いを言うことができたらその人の願いは叶うのです。強く思っている願いだからこそ叶えることができるのだと、私はそう思います。

そして、その願いを叶える確率を上げる方法を最近発見しました。それは口に出して言うことです。口に出して誰かに言ってしまえば、言ってしまったからにはやらなくてははいけない。もっといいことに、誰かが自分の願いを覚えていてくれて有益な情報を持ってきてくれるかもしれない。あるいは、協力してくれそうな人物を紹介してくれるかもしれない。あるいは、その人自身が協力し

てくれるかもしれない。もちろん「ふーん、そうなんだ」で終わることの方が多いと思いますが、下手な鉄砲でも数撃てばあたります。

七夕は終わってしまいましたが、夜空に流れ星を見つける日はいつくるかわかりません。突然の流れ星にお願いができるよう、「国家試験合格」を強く思いながら、口に出して同級生と励ましあいながら、これからの臨床実習、さらには国家試験勉強に励みたいと思う今日この頃です。



歯学部生の今

歯学科6年 小野喜樹

6年前、どのような大学生活をイメージして、またどのような志を持ち大学に入学してきたのか、卒業を間近に控えよく考えるようになった。夢のようなキャンパスライフ、夕方までは授業に出て夜は友達と遊び、休日は旅行に行く、そんなような生活をイメージしていた。そして、卒業時にはスーパーデンティストになると……。

今現在我々6年生は臨床実習が残り3か月で終わりを告げようとしている。臨床実習を振り返ってみると、私の夢描いた生活は訪れることはなかったが、逆にもっと充実した生活を送れたと思っている。新潟大学の臨床実習は全国の歯学部の中でも非常に恵まれていて、指導医の先生のもと実際に患者さんを担当し診療する機会をいただける。しかし、臨床実習を経験する中で、実際に患者さんを担当することは甘いことでなく非常に大変なことなのだと感じさせられた。自分が担当させて頂いている患者さんの口腔状態を良くしたいと切に願い、最終的な口腔の状態をイメージし

て治療方針を考えるのは楽しくもあるが非常に難しくて頭を抱えていたのを記憶している。知識も技術も不足する中で治療方針を考え、当日の診療の予習をし、診療後反省をすといった生活で時間が飛ばように過ぎていった。そのように自分なりの努力を重ねても診療に臨むとライターの先生方の力なしに自分一人で診療することはとても難しく無力さを感じる日々であった。しかしこのような講義や見学だけでは得ることのできない経験が学生生活の間にできたのは大きなアドバンテージだと思う。卒業後もこの実習を生かしスーパーデンティストになるためにおおいに努力していこうと考えている。

さて、このような充実した臨床実習を送るためには同期の存在も重要であった。私は、親元を離れて新潟で暮らしているため、6年間に関しては48期の同期と親よりも一緒にいたということで、同期は友達というよりもみんな親戚といった感じである。私が思うに48期は非常に大人しく静かな



臨床実習技工室にて。さて筆者はどこでしょう。

学年であったが、技工室で一緒にワイワイしてた日々はとても楽しかった。卒業にともなって、一番悲しいのはこの親戚の人たちと離れ離れになることである。48期が同級生でよかったと心から思うと同時に、今後の別々の地での親戚たちの活躍を聞くのが楽しみであったりする。

最後になったが、我々はもうすぐ卒業する。卒業まで最後の学生生活を全力で謳歌するとともに、とりあえずしっかり歯科医師になるために国家試験という目の前の強敵に全力で立ち向かっていきたい。



歯学部生の今

歯学科6年 齊藤善彦

早いもので気づけば大学卒業が半年先に迫っている。それまでに研修先を決め、臨床実習を終え、国家試験を受けなければならない。今年は休む暇がない。

入学して間もなく開催された赤塚の合宿の場で担当の先生が当時新生であった私たちに対して「人生とは自転車のようなもので勢いがなくなると安定しなくなる、だから規則正しい生活を送り続けることは大切だ」とおっしゃっていたのが今になって思い返される。

臨床実習が始まるとそれまでの日常から自転車のギアが急に2段階くらい上がるように生活リズムが変わりしばらくは慣れない日々を過ごしていたが、今では順応し臨床実習の終わりを見通すことができる段階までようやく来た。入学してからここまでとても充実した日々を送ることができて

いるのはもしかしたら休む暇をあまり与えてくれない大学のカリキュラムのお陰なのかもしれない。

ところで、日々の臨床実習において大切にしていることをこの場をお借りしてお伝えしたい。「基本を大切にすること、何事にも誠実であること、プロフェッショナルであること」当院式の日組織再建口腔外科学の小林正治教授から臨床実習生の私たちに向けていただいた言葉である。当時持っていたメモ帳に書き込んであり今でもたまに見て忘れないように心掛けている。診療にかぎらず何事も慣れるにしたがっていい加減になりがちになるので、歯科医師となってからも常にこの言葉を心に留めておきたいと思う。

冒頭で今年は忙しいということを強調したが、9月には佐渡国際トライアスロンのリレー部門



Molars

(スイム：2.0km・バイク：105km・ラン：21.1km)にチームでの参加を控えている。夏休み期間も研修施設の見学や国家試験勉強に追われて練習する時間なんてないじゃないかと思われるかもしれないが、まだ訪れたことのない佐渡で大学生活最後の夏の思い出にしたいと思い、限られた時間を見

つけながら3人で日々練習に取り組んでいる。最近、暇な日々を送るよりも適度に（適度じゃないかもしれないが…）忙しく充実した日々を送っていた方がきっといい人生が待っていると思えるようになってきた。まずはクラスの仲間とともに残り少ない大学生活を全力で駆け抜けたい。



口腔生命福祉学科生の今

口腔生命福祉学科2年 宇佐見 早 希

入学してから早1年。2年生が始まってから約3か月が過ぎました。今年の4月から旭町キャンパスに移動し、本格的に歯学部生としての生活が始まりました。ずっと興味を持っていた歯科の勉強ができ、今とても楽しいです。今回は「歯学部生の今」ということで口腔生命福祉学科の学校生活を紹介します。

初めに、授業についてです。私たちの授業は主に「PBL (Problem-Based Learning)」という形式で進んでいます。PBLとは、提示されたシナリオから自分達で問題を見つけ出し、自己学習を行い、同じグループのメンバーで討論を行いながら問題解決を行うことを通して自己解決能力を向上させるものです。この授業は講義ではなく自ら学習するので、学習したことが頭に残りやすいです。最初は医療系の知識が全くなくとても大

変でしたが、講義やPBLの時間に学習したことが積み重なり、手応えを感じられるようになり、最近はPBLの授業がとても楽しくなってきました。また、まだ歯科実習は始まっていないのですが、歯学部の施設を見学した際に素晴らしい実習設備が整っていて、今から実習するのが楽しみになりました。2年生になり、本格的に専門的な授業が増え、たくさんの知識を身につけなければいけないことに不安を感じていますが、日々の授業を大切にして2年半後立派な歯科衛生士または社会福祉士になれるように頑張りたいです。

次に、サークルについてです。私は五十嵐キャンパスのダンスサークルに所属しています。たくさんの1年生が入ってくれて、より活気溢れるサークルになりました。今は1年生に基礎を教えたり、私自身もレベルアップを図るため自主的に



ダンスの先生に習いに行ったりしています。たくさんの素晴らしい仲間と一緒に踊れ、とても楽しいです。また、今年の10月には代替し私達の学年がサークルを引っ張っていかねばいけません。先輩方が作り上げてきたこのサークルを守っていくのと同時に良い意味で変えていきたいと思っています。そのために同期とより仲良くし、お互いに協力していけたらと思います。今しかな

い学校生活、勉強とサークルを両立できる人になりたいです。

2年生になり環境が大きく変わり最初は戸惑いや不安がありましたが、最近は楽しさのほうがまさるようになりました。口腔生命福祉学科は女子20人ということだととても仲が良く毎日が楽しいです。たくさんのことを学び、後悔のない楽しい学校生活を送りたいです。



歯学部生の今

口腔生命福祉学科3年 宮澤 帆乃花

「えーん、痛いよ～～。ああ、ちゃんと歯みがきしておけばよかったなあ、、、」6月某日。虫歯のお面をかぶりながら発したこのセリフ。歯科保健指導のための幼稚園実習が、3年生前半の学校生活の中でいちばん印象に残る出来事でした。

1年前はまだ座学が多かったはずなのに今とっては実習が増えて、改めて自分が歯学生なのだ日々感じています。超音波スケーラーを用いて相互実習をしたり、歯科麻酔やエックス線撮影の補助の実習をしたり、以前よりもさらに臨床に近い学習内容となってきた大変ではありますが、とても充実した毎日を過ごしています。冒頭で述べたように学外での実習も始まりました。後期には保健センターで保健指導を行う実習も控えており、事前学習や指導媒体の作成に取り組んでいる



ところ です。

この春から福祉の勉強も始まりました。早期援助技術演習では特別養護老人ホームや社会福祉協議会、児童相談所、障害者福祉センターで実習を行いました。福祉に関する知識はほとんどない状態で実習に挑むのは不安でしたが、反対に知識が乏しかったからこそ多くのことを現場で吸収できたのではないかと思います。福祉分野は児童や障害者、高齢者など対象者によって支援サービス等が異なること、毎年のように法律や制度の改正が行われることから、それぞれをしっかりと理解していなければなりません。難しいけれども、年金制度など身近なくみも学べるためとても面白いです。

さらに、4月から口腔12期のメンバーに新しく6人の仲間が加わりました。1人1人がとても個性豊かで、教室の賑やかさがさらにパワーアップしたように思います。25人全員で同じ目標を目指して、お互い高め合っていけたらいいなと思います。

大学生活も折り返し地点を過ぎ、そろそろ進路についても考え始めるようになりました。入学したばかりの頃は明確なビジョンが描けていなかったけれど、現場で活躍される方による講義を受ける中で将来こうなりたいという方向性が見えてきました。今は「とりあえず体験してみる」をモットーに、ボランティア活動など積極的に参加しています。気がつけばもう夏。後期になれば少しずつ病院に出る機会が増え、4年生になれば毎日の病院実習に加えて特論に就活に2つの国家試験が控えています。日を増すごとに忙しくなってきますが、1日1日を大切に後悔のない学生生活を過ごしたいと思います。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科4年 浦澤千晶

『4年生？そんなのまだまだ先でしょ？』…大学に入学したての私は、そんなふうに考えていました。しかし、そんなことはありませんでした。あっという間に4年生になり、もうすでに夏休みを目前にしていることに、本当に驚いています。きっと、こう思っているのは私だけではない…ですよ？

4月初めに、3日間みっちりガイダンスを受けた私たちは、その翌週から4・5階の歯科外来や入院病棟に通う臨床実習の日々が始まりました。初めて外来に1日通して出た日の緊張と不安を今でも覚えています。どんな処置がなされているの

か？それにはどんな準備が必要か？アシストってどうすればよいのか？などなど、はじめはわからないことばかりでした。始まって2か月が経った今も、各科を回るごとに課題を多く感じるところですが、これまでに回った科での学びを生かしつつなんとか食らいついていっている…といったところでしょうか。もちろんまだまだ一人前には程遠いですが、先生方や歯科衛生士さん、看護師さんをはじめとした病院スタッフの皆様によるご指導のおかげで、日々一歩ずつ成長できているのではないかと思います。先生方、スタッフの皆様には大変感謝しております。臨床実習後半もご指導よろしくお願い申し上げます。

さて、上記のように金曜日の講義以外は臨床実習の毎日ですが、私たちの実習は歯科だけではありません。福祉の勉強も併せて行っている私たちには、社会福祉現場実習（正式な科目名は相談援助実習）という、もうひとつの大きな実習があります。これは、1か月間病院を離れて学外の実習先に赴き、ソーシャルワークの実際を学ぶというものです。児童相談所や就労支援事業所、社会福祉協議会、特別養護老人ホームなど実習先は様々で、数人ずつに分かれて実習をしています。私は精神に障害のある方々を対象とした就労支援事業所に行かせていただきました。病院とは全く違う世界に飛び込み、戸惑うこと、悩むことなどありましたが、そこで出会った利用者の皆さんやスタッフの方々との出会いから、貴重な学びを得ることができました。

夏休みを挟んで9月から臨床実習は再開され、他にも就職活動や特論、1月以降は資格取得のための国家試験が2つ待ち構えています。私たち4年生の闘いはまだ続きますが、27人全員で助け合いながら、みんな笑顔で卒業できればいいな、そう思っています。



大学院へ行こう！

予防歯科学分野 野々村 絢 子

予防歯科学分野大学院3年の野々村絢子です。大学院生活も残すところあとわずか、日々研究、臨床に奮闘し、充実した日々を送っています。

この度、「大学院へ行こう」というテーマを頂きましたが、歯科医師として働くにあたり、大学院へ進学するかしないかは、今後の歯科医師としての生き方に大きく関わってきます。特に、女性の方は大学院を選択した場合、4年間研究生活を続けるわけですから、結婚、出産などの人生プランを考えた時に、この4年間をどのように過ごすかどうかは、選択次第で大きく変わってきます。まだ大学院を卒業していない私が言うのもおこがましいかもしれませんが、男女問わず歯科医師として長く働く気持ちがあるならば、大学院へ進学した方が良いと思います。特に将来、大学や行政等で働くことを視野に入れている方は、なおのことです。

私が思う、大学院進学の特長を3つ述べま

す。

1つめは、論理的な考察力を養うことができる点です。歯科医師として臨床現場で働いていると、編み出された新たな治療法を取捨選択し、吸収していかなければなりません。その際、どれを信頼するかを判断する時に大事になってくるのが論理的な考察力です。大学院では、研究するにあたり、統計学的にも問題なく、他人から信頼される研究のデザインの作り方を勉強します。その経験が、多くの情報の評価に役立つと思います。

2つめは、人前で講演することに慣れ、物怖じしなくなる点です。大学院在学中に自分の研究発表をする機会が何回かあります。その時にどのようなスライドを準備したらいいか、どのように話して質疑応答すればいいかを学ぶことができます。多くの先生は、歯科医院で勤務すると思いますが、そこでも講演する機会はたくさんあります。大学院でプレゼンテーションのやり方を勉強



していれば、自信を持って話をする事が可能です。

3つめのメリットは博士号を取得できることだと思います。博士号の捉え方は人様々ですが、博士号を持っている先生は、科学的、論理的思考を学んだ方だと評価できると思います。また、海外においても博士号の肩書きは、意義のあるものだと考えられます。

これまで3つのメリットを挙げてみましたが、大学院へ行くと診療技術が鍛えられないのではないかと心配される方もいらっしゃるかもしれません。確かに、診る患者の数は開業医に比べて少ないかもしれませんが、大学院在学中にも外来の他、開業医等での診療を経験することができますので、技術の習得は可能です。診療科によって違いますが、大学でしか経験できない症例もありま

すし、様々な治療法を学ぶこともできます。また、自分の診療内容や症例についても指導医の先生からフィードバックを受けることができます。さらに、大学院の同期にはあらゆる診療科の仲間がおり、大学院卒業後も治療で困ったことがあれば相談することができます。

最後に、私は女性でも生涯歯科医師として働く方はぜひ大学院へ進学してもらいたいと思います。意外と4年間はあっという間に終わります。大学院を卒業すると、その後の進路の可能性は広がります。私の先輩には大学院卒業後海外へ飛び、国際機関でキャリアを積んでいる先生もいれば、大学院在学中に結婚し、卒業後に出産、その後、復帰された先生もおられます。色々な人生がありますが、少しでも大学院を選択肢に入れているならば、ぜひ大学院へ進みましょう。



大学院に行こう

歯周診断・再建学分野 干川 絵美

歯周診断・再建学分野大学院1年目の干川絵美です。今回『大学院へ行こう』というテーマで原稿依頼を頂きました。私はまだ院1年目なので、何を書こうか迷うところですが、私が大学院へ行こうと思った理由や大学院へ進学してからの3ヵ月間について紹介させていただきます。

私は、学部を卒業後、新潟大学医歯学総合病院の歯科総合診療部というところで1年間研修させて頂きました。私が、大学院へ進学したいと思ったのは、学生の頃の臨床実習がきっかけでした。一人の先生と数人の学生で、一人の患者さんの初診から基本治療終了までの治療を行っていく歯周アドバンスで、歯周治療や治療方針の立て方に興味を持ち、もっと先生方から教わりたいと思い、大学院を考えるようになりました。しかし、一つ悩みだったのが、「研究ってどんな感じなのか？」でした。研修医になってから、既に研究をしている同期が楽しそうに研究の話をしており、聞いて

いるうちに自分も研究をしてみたいと思うようになりました。また、先輩方からお話を聞き、「外へ出てから集中して研究するのは難しいし、実際にやってみないとどういうものかわからないだろう」と思うようになりました。「この研究をやりたい！」という考えは正直まとまっていませんでしたが、漠然と研究にチャレンジしてみたいのと歯科治療についてももっと学びたいという思いから大学院進学を決めました。

ここからは、実際に大学院へ進学してからの3ヵ月間について紹介したいと思います。私は、歯周診断・再建学分野に所属していますが、研究は生体組織再生工学分野でやらせて頂いています。歯周科では、外来やアルバイト先で、先生方から学ぶことがたくさんあります。診療手技に対するアドバイスはもちろんのこと、患者さんに対する説明一つ一つにおいても、一緒に聞いている私が「なるほど!」「説明がわかりやすい!」と



勉強になることばかりです。また、私と同時に歯周科に進学した者が、私を含め9人います。9人は多いとよく言われますが、同期からは臨床や異なる研究分野の話も聞けて、良い刺激を受けています。研究では、初めての細胞培養で先生方に迷惑ばかりかけていますが、徐々に慣れてきて、知らないことを学ぶのが楽しい時期です。論文や教科書で知らないことを調べたり、先生方に教えて頂いたりで、勉強になる毎日です。細胞が相手で悩まされることもありますが、うまくいったとき

の喜びもあり、毎日奮闘しています。

まだ3ヵ月しか経っていないので、大学院の良さ悪しは伝えられませんが、私は色々な先生方と関わることができ、多くのことを教えて頂き、大学院に進んで良かったと感じています。もし、卒業後の進路で悩んでいる方がいらっしゃいましたら、大学院へ行った先生方にお話を聞いて、大学院進学へ興味を持っていただけると嬉しく思います。



大学院に行こう

医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻 高橋 駿 介

初めまして。大学院口腔生命福祉専攻修士課程2年の高橋駿介と申します。この私のページでは、“大学院に行こう”ということで、これまでを振り返って福祉分野を専攻する私が考える“大学院の特徴”や“大学院に進学してよかったと思う点”を中心にお話を進めていきたいと思えます。この文章が皆さんの大学院進学への大きな参考となれば幸いです。

まず、大学院と言ったら皆さんが頭に思い浮かべるのが、論文研究ではないかと思えます。論文研究を行うことは、物事を考え行動する力を養う大きな助けになる他、自らの専門性を自覚し、目標や理念を明確にした上で考えて行動する大きな財産になると思えます。

また、大学院の講義では実際に学外の講習会や外部の施設を訪ねる他、外部の講師等の専門家の方々に実際にお話を聞く機会もあります。もちろん、職場にて特定の分野に携わるほど、深く知ることはできないかもしれませんが、その分幅広い分野についてのことを知ることができ、一つの物事に対しても多様な観点からとらえる大きな手助けになっていると私自身感じております。

これらのことから、大学院進学の良い点について述べてきました。しかし、その一方で大学院進学の少ない短所の一つとして、「知識を深めること

ができて、現場で経験を積むことができない」といった点もあると思えます。しかし、大学院ではそうした短所についても解消する柔軟な教育支援体制が整っています。

ここで、私の話をさせていただきますと、私はこの四月からは社会人大学院生として大学院の学業に励む傍ら、新潟県の職員として障がい者施設にて勤務にあたっています。このように、新潟大学の大学院では年度が替わる際に「大学院生→社会人大学院生」と切り替えができるのであります。もちろん、職務と勉学を両立することは大変ではありますが、一人の社会福祉士として自らの専門性やレベルを本格的に高めることができる二年間であると思っています。

これらのことから、大学院の特徴や私の感じたことを述べてきました。自分の興味のある物事について学ぶことができるだけでなく、現場で経験を積むことができているこの期間は密度の濃いものであり、やりがいを感じることであります。これから大学院進学を少しでも考えている方は是非、進学を検討されてはいかがでしょうか？ ...ということをお願いいたします。ご清覧ありがとうございました。

教授に就任して



教授に就任して

口腔生化学分野教授 照 沼 美 穂

平成28年8月1日付で口腔生化学分野の教授に就任いたしました、照沼美穂（てるぬま みほ）と申します。私は茨城県日立市に生まれ、父の仕事の関係で幼少期の8年ほどをブラジルのリオ・デ・ジャネイロで過ごしました。言葉もわからない国に突然行ったのですが、現地の学校に通ったことから、ポルトガル語を覚えるのと同時に友達も増え、性格も次第に明るくなっていったような気がします。

茨城の高校を卒業後、南米のように暖かな所に住みたいと九州大学歯学部に進学しました。福岡に行ったことのある人はわかると思いますが、夏は非常に暑く、博多駅前から海に向かって伸びる大博通りのヤシ並木が南国に来たな～と実感させてくれるのですが、冬は意外に寒く、雪も降り（日本海に面しているので当然と言えば当然なのですが）、逆に騙された～となるのです。そのような中で過ごした大学生活はとても楽しく、歯学部サッカー部のマネージャーとして部活動に精力を注いだほか、友人たちとの旅行では国内外をあちこちまわりました。実はオールデンタルでラグビー部を応援するために冬の新潟に来たこともあります。

卒業後は研修医をせずに大学院に進学しました。学部時代から出入りしていた口腔生化学講座の平田雅人教授（現・九州大学名誉教授・福岡歯科大学客員教授）のもとで細胞生物学や生化学の研究手法を学び、平田教授と兼松隆准教授（現・広島大学歯学部細胞分子薬理学講座教授）が発見

されたカルシウムシグナリングに関与する分子PRIPの中枢神経における機能の解明を研究テーマとしていただきました。歯学部でなぜ中枢神経の研究？と思われるかもしれませんが、歯学を「口腔医学」と位置付けて、広い視野を持って口腔の研究を行うという考えが最近言われるようになってきたことから、私はこれからの歯学の発展に大変重要な研究であると考えています。

大学院での研究は、研究室に籠るだけでなく、海外で勉強する機会をたくさん頂きました。1年目の冬は韓国の浦項理工科大学（POSTECH）で過ごし、学生寮で韓国人の大学院生とルームシェアをしました。クリスマスもお正月も帰国することができない決まりだったため、現地で仲良くなった学生たちと一緒に寮で過ごしました。講座の先輩が日本から送ってくださったカップの年越し蕎麦を食べたことが懐かしいです。その他にも英国のユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）には2年連続で短期留学させていただき、神経科学研究の基礎を学びました。この時に勉強させていただいたStephen Moss教授の研究室に、ポスドクとしてその後お世話になることになりました。

学位取得後、私がMoss教授の研究室に所属する頃には、研究室はなんとアメリカのフィラデルフィアにあるペンシルベニア大学に移動していました。欧米では、研究室を主催するようになった後でも数年単位でどんどん大学を移動することは、珍しくはありません。実際に私がフィラデル

フィアに移った3年後には、研究室はボストンのタフツ大学に移転することになります。結局Moss研究室には大学院時代も含めて8年半、3つの大学で研究しました。私がMoss研究室を選んだ最大の理由は、Moss教授が、痛みの軽減や鎮静効果がある抑制性神経伝達物質GABA（ギャバ）を介した神経伝達機構研究の第一人者だったからです。神経伝達の仕組みを解明する研究以外にも、様々な神経疾患や精神疾患の原因を解明する研究を行うことができ、基礎から病態までを幅広く研究できる研究者として、徐々に成長できたと思います。

そして2013年には、イギリスのレスター大学で自らの研究室を立ち上げることができました。研究室を主催する立場になると、外部資金の獲得が必要になってきます。それまでにもアメリカでグラント獲得の経験はありましたが、イギリス特有の膨大な書類の準備には悪戦苦闘しました。しかし、研究費を獲得して学生達と共に研究を行うことはこの上ない喜びで、自分の研究室を持つことの楽しさを実感する日々でした。加えてイギリスでは新米大学教員は全員、高等教育の専門家になるために高等教育の修士過程を修了し、英国高等教育アカデミー（Higher Education Academy: HEA）のフェローになることが義務付けられています。そのため講義や研究指導の合間をぬって私自身が教育者になるために様々な講義を受けました。最終的には修士論文を二つ書き、修士号を取得して、無事にHEAのフェローになることができました。イギリスには3年ほどいましたが、その間にはスコットランドの独立住民投票や帰国間際のBrexitなど、イギリスの将来を揺るがす大きな出来事がいくつもあり、現在も

なお揺れていますので、今考えると帰国を決意したのは間違いではなかったのかなと思います。

さて、新潟大学に着任して早1年、日々口腔生化学分野の研究と教育に従事しているわけですが、まず新潟に来てよかったのは知り合いが意外にもたくさんいることです。小児歯科の早崎治明教授、斎藤一誠准教授、岩瀬陽子助教は大学の同窓生ですし、医学部機能制御学分野の神吉智丈教授は大学院時代に同じフロアで研究していました。またアメリカ時代の知り合いや国際学会で知り合った先生も多くいらっしゃり、着任当初から大変お世話になっています。さらには前田健康学部長をはじめ、歯学部の先生方がとても良くしてくださるので、ほとんど苦勞することなく仕事できています。

生化学は生命現象を科学的に解明する学問であり、どの分野の研究を行うにしても、メカニズムを知ろう、解明しよう、とするのであれば絶対に学ばなければならない大切な学問です。私の専門である生化学・分子細胞生物学を脳神経研究に限らず、今後は歯科臨床研究と基礎研究の橋渡しをすべく、様々な細胞やがん細胞でも行っていく予定ですので、興味のある方は是非ご連絡ください。

最後に、新潟大学口腔生化学分野では歴代の教授が様々な専門の研究を行ってきました。このような講座の後任を担当させていただくことは、大変光栄なことですし、同時にプレッシャーも感じています。今後とも、オリジナリティーに溢れる研究を行い、分野のさらなる発展に貢献できるように精いっぱい努めさせていただく所存です。どうぞ宜しくお願い致します。

地域保健医療推進部

医歯学総合病院 地域保健医療推進部 副部長 鈴木 一郎

1. はじめに

地域保健医療推進部は病院の中央診療施設のひとつで、診療機能はもたず、医療安全管理部や感染管理部などと同様に病院機能をバックアップする部署です。

病院統合前の2003年4月に地域連携や退院支援を担当する部署として医学部附属病院に設置され、旧医学部附属病院入退院口近くの小部屋で看護師1名のスタッフでスタート、その後病院再開発にあわせて院内を転々としてきましたが、2012年6月からは外来棟エントランス階にて現在30名近くの多職種チームで業務にあたっています。

2. 地域連携と退院支援

医療機関はその機能、規模や立地によりそれぞれ異なる役割を持ち、地域の医療提供体制はそれらが適切に連携することで完結する必要があります。大学病院は医療法上、特定機能病院と位置付けられ、三次医療圏など広域に対して救急や高度医療を提供する役割があり、地域連携を担う部署にはそのような医療を必要とする患者さんをスムーズに受け入れるための前方連携機能、そして治療後にリハビリや在宅療養が必要な患者さんに対して転院や在宅移行のための支援を行い、次の医療機関や地域の在宅介護資源と連携する退院支援・後方連携機能が求められます。

このうち前方連携については、2011年から



地域保健医療推進部スタッフ

FAX紹介予約システムを運用しており、歯科では口腔外科のみの導入となっていますが、現在全紹介患者の約半数が本システムによる受診となっています。

一方退院支援・後方連携については、現在11名の医療ソーシャルワーカーが主体となり、年間約2,000名の入院患者（全入院患者の13%）に対して院内外が多職種と協働し支援介入を行っています。退院支援は医療側には在院日数を短縮し限られた病床や手術室等病院の持つ資源を効率的に運用する、また患者側には早く生活に戻るための支援という意味を持ちます。特に高齢者は障害をかかえたまま退院することも多く、また長期入院は原疾患と関係なく介護依存度を上げる原因にもなります。更に、独居や経済困窮など社会的弱者が適切な医療を受け生活に戻るためには、様々な社会的支援も必要です。これらの業務を行う部署は、一般に、医療連携部とか地域連携室といった名称がつけられていますが、地域保健医療推進部という名称には、医療のみならず広く福祉や保健といった視点から患者さんや地域を支援するという意図が込められています。

3. 医療福祉相談

院内で発生する様々な相談の中で、受療の相談、医療・生活費や休学・休職に関する相談、あるいは介護保険や各種制度等の社会資源の利用など、医療そのものでなく医療を適切に受けるための相談について地域保健医療推進部が担当します。これらの相談は退院支援とも密接する業務で、年間約7,000件の相談に対応しています。また、本院は地域がん診療連携拠点病院および肝疾患診療連携拠点病院に指定されており、がんや肝疾患については院外からの相談にも応じています。

4. 医歯連携

地域保健医療推進部は院内外医科歯科連携のコーディネーターも担っています。具体的には口腔ケア診療班を組織し、救急搬送患者に対する口腔ケア介入や医科入院中患者の歯科受診のシステム構築などを行ってきました。また、歯科では2012年の外来棟移転を機に医療連携口腔管理チームにより、周術期口腔機能管理など医科入院患者に対する介入を行っていますが、今後は次項に示す患



患者総合サポートセンター（外来エントランス階）

者総合サポートセンターにおいて、医科手術患者に対する周術期支援の一環として入院前の口腔スクリーニングから治療や管理につなげるシステムの運用を開始しました。

5. 退院支援から入退院支援、そして患者総合支援へ

病院資源の効率的利用と患者を早期に生活に戻すための退院支援を更に進めるため、入院前から退院支援を開始し、入院から退院にいたるフロー全体をマネジメントする入退院支援へと体制強化することとしました。2013年に地域保健医療推進部に隣接して入退院センターを開設、入退院手続きを一元化し、入院予定患者の情報を入院前から把握しリスクチェックや退院支援を含む必要な介入を早期から着手する体制としました。更に今年度は、地域連携・退院支援、入退院センター機能に加えて相談や病床管理などをシームレスに行う部署として患者総合サポートセンターへの統合・改組を進めています。

6. おわりに

地域医療構想や地域包括ケアシステムの構築が進むなか、私たちは院内で適切な病床利用と患者を速やかに生活に戻すための入退院マネジメントをすすめる一方で大学病院として地域医療マネジメントにも関わってゆく必要があります。院内では、患者総合サポートセンターの機能拡充を進めてゆきますが、とりわけ高齢者の認知・身体機能のチェックは優先度が高く、口腔機能スクリーニングや歯科の介入につなげることも重要です。また対外的には、地域における連携体制を強化する目的で、昨年度から新潟市医師会とともに新潟地域病院連携会議を立ち上げていますが、今年度は在宅医療や介護フィールドとのネットワーク構築を進めてゆきたいと考えています。

地域保健医療推進部には「つなぐ」と「ささえる」をイメージしたロゴがあり、スタッフの白衣やバッグのアイコンとしています。地域における新潟大学病院の役割をふまえて、そして医科と歯科の統合病院の利点を活かし、患者の医療をつなぎ生活をささえる部署として、皆さんと思いをひとつにしてこれからも前進してゆきます。



地域保健医療推進部

シンボルロゴ：医療をつなぐ、生活をささえる

— 『山と私』 —

外来4・5階看護師 榎 並 美智子

今回、思いがけず歯学部ニュースの執筆依頼をいただき、文才の無い私は少し躊躇しました。しかし、歯科外来での勤務も5年目になり、今年度看護師として定年を迎えるタイミングでのお話だったため、せんえつながらお引き受けすることにしました。

さて、平成15年に歯科、医科が合併し、はや14年が経ちました。当時の私は中央手術部に勤務しており、旧歯科手術室に助勤に行ったことが懐かしく思い出されます。特に印象に残っているのは歯科医師をはじめスタッフの接遇の良さでした。皆さんの気持ちのいい挨拶が、慣れない部署での不安を和らげてくれました。そして、種々の懸案事項もありながら、国立大学の付属病院では珍しい医科歯科総合病院としてスタートしました。縁あって4年半前当部署に配置換えになり、私なりに連携強化に微力を尽力してきました。現在は口腔外科領域における悪性腫瘍患者の入退院支援や多職種カンファレンスの活性化に向け模索しております。

話は変わりますが、タイトルをご覧になって山って何？と思われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。実は登山を始めたことが、私にとって一つのターニングポイントだったので、少しお話しさせていただこうと思います。

初めての登山は中学時代の授業でした。しかし、この時は苦しさが行先し、「私の人生に山登りは絶対ない!!」と思っていました。そんな私が本格的に登山を始めたのは、仕事の上では中間的立場となり、40歳を過ぎ、やりがいを見いだせずにいた頃、友人からの誘いがきっかけでした。初めはロープウェイ等を利用した楽々登山からでしたが、自分の足で頂にたどり着いた時、何とも言

えない感動を味わいました。そして、登山を始めて分かったことは、中学時代の苦い記憶は、他人のペースで登り無理をしていたからで、自分の体力に合ったペースで、他人より時間はかかってもいいと割り切ることが大切だということでした。山ガール？と化した今は、登った者だけが味わえる達成感にハマってしまい、北アルプス等の映像を見ると「山が私を呼んでる！」と、年甲斐もなくワクワクしてしまいます。長～いやつは苦手ですが、知らないおじさん達のいびきものともせず爆睡、お風呂に入れないことやぼっとな便所も平気になりました。

絶景ならネットなどで簡単に観ることが出来る現在、周囲からは何故辛い思いをしてまで…と言われる。しかし、そこに行かなければ実感できない匂いや温度があり、それらが登頂した時の達成感を更に強くしてくれるのです。登り始めは快晴でも6合目位からガスが出始め、山頂は雨や強風で1m先も見えないなんて残念なことや、天候によっては登頂を断念せざるを得ない…なんてことも。山には何もそろっていませんし不便なことばかりです。でも、これほど魅了された理由は、苦しい登攀の末たどり着いた頂からの雄大な風景や、自然の多様性、そこに行かなければあえない可憐な山野草に魅せられ、さらなる未知の世界を求める欲求に、心が突き動かされるからかもしれません。今は気持ちが先に折れないよう、『諦めず登って行けば必ず頂にたどり着ける』と、自分を奮い立たせ山頂を目指しています。

どんな頂も一步一步、歩を進めることでしか到達することは出来ません。また、登ったら無事に帰ってくるのが、本当の意味での登山だと思います。そのためには事前に天候やコース、携帯品

を確認し、何より体調を万全に望むことが重要となります。人生においては、どんなに頑張っても辿り着けないこともあります。しかし、諦めない限り可能性はゼロでは無く、自分自身が「十分頑張ったからもういいか。」と思えれば、納得でき、後悔も残らないと思います。

私は、先入観を捨て、何かを始めることの大切さ、始めることで知らなかった世界が開けるということ、登山から学びました。更に、目標を見失わず、他人と上手く協調しながら、自分のペースでひたむきに努力すれば、いずれ目標に達する

ということを知りました。

最後まで拙い話にお付き合いいただき、ありがとうございました。歯科のことは何もわからない私が、ここまで楽しく勤務できたのは、暖かく迎え入れてくださった皆様のおかげだと、心から感謝しております。それまでは、全人的に患者を把握することが、看護の基本と称し、仕事に臨んでいましたが、生きるための基本である『食べる』ことの重要性を、再認識することが出来ました。残された時間を有意義に、最後まで自分らしく務めていきたいと思っています。



素 顔 拝 見



包括歯科補綴学分野
助教

米 田 博 行

平成29年4月より包括歯科補綴学分野の助教を拝命いたしました米田博行と申します。今回、素颜拝見の寄稿させて頂く機会を得ましたので、簡単ではありますが、思い出話と自己紹介をさせていただきますと思います。

生まれは千葉県の松戸、幼少期まで生活を送り、その後、大学に入学するまで神戸で過ごしました。神戸というと風光明媚な港街を想像されると思いますが、私が住んでいたのは、源平合戦の逆落しでも有名な鶴越（場所に関しては諸説がありますが）のあたりの山あいに住んでおりました。そう書くと、なんとも穏やかな思春期時代を過ごしたように感じられますが、そこは関西。千葉から引っ越してきた私には衝撃的なことが多く、果敢な時期を過ごした関西での経験は、自身の内面形成に大きな影響を与えたと思われま。特に精神面のタフネスはその時に鍛えられたと思っています。

その後、大学への入学をきっかけに仙台に移り住みました。大学では、かねてより興味があった弓道部に入部。今でこそ、弓道部に入ってくる学生が多くはなってきましたが、私が所属した時は人数も少なく、最終的に同期で弓道部に残ったのも私、付属技工士学校の女子の2人。しかも、技工士学校は2年間で卒業のため、サークル活動ができるのはほぼ1年。結果、ほぼ実質1

人といった状況でした。最初は寂しくもありましたが、先輩方にはいろいろ気にかけてもらい、大変お世話になり、後輩との親睦も深めることができました。また、サークルとして親交の深かった新潟大学の弓道部の方々とも充実した楽しい時間を過ごさせていただき、特に大会における、試合や個人戦の前日の懇親会にて、飲んでは吐き、吐いては飲んでの、潰し潰れるまで飲み続ける楽しい時間を過ごさせていただきました。残念ながら、飲み会等にて、本当に、本当にお世話になった方々は、すでに大学を出られてしまっていたようですが、改めて心より厚く御礼を申し上げます。その頃のご恩をこれからの新潟大学との関わりの中で返してまいりたいと思います。

大学卒業後は、東北大学大学院歯学研究科口腔システム補綴学分野に進学し、有床義歯を中心に補綴治療に行ってきました。また大学院修了後は顎関節症やその他の非歯原性疼痛を持つ患者様の補綴治療にも携わらせていただきました。研究に関しては口腔分子制御学分野にお世話になり、マウスを用いた咬筋を主とした筋活動とヒスタミンの関係について研究を携わってきました。終了後は、筋電図を用いた表情筋が咀嚼筋に与える影響に関する研究についても関わってきました。これらの経験を活かし、新潟大学でも新たな研究を行い貢献してまいりたいと思います。

最後になりましたが、小野高裕教授をはじめ、分野スタッフの方々には心より感謝申し上げます。また諸先生にはこれからお世話になることもあると思いますが、歯学部および歯科界のため努力していく所存ですので、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



高度口腔機能
教育研究センター
特任助教

山田 友里恵

2017年4月より高度口腔機能教育研究センターの特任助教を拝名しました、山田友里恵です。本学出身の42期生です。卒後は同大学院歯科麻酔学分野に進み、研究は口腔解剖でお世話になり博士課程を修了しました。

私は生まれも育ちも新潟市の、生粋の地元民です。子供時代は、特に語れるようなエピソードもなく過ごしてきましたが、思い出されるのはクラシックバレエ漬けの日々でしょうか。始めは可愛い衣装を着て舞台上るのが嬉しくてお稽古に通っていたのですが、年を追うごとにストーリーや感情を体で表現することの芸術性にすっかり魅了されていました。ところで、バレエの「爪先立ちで踊る」ことは、大なり小なり足の痛みを伴います。私はその痛みで苦労した方で、足趾には常にいくつもマメができていましたし、外反母趾にも悩まされました。マメの跡で大人になった今も足趾はいびつな形をしています。痛みを耐えて頑張った当時は思い返され、私は気に入っています。もう踊ることはないですが、今でもバレエ鑑賞は大好きです。劇場で生の舞台を見るのはもちろん、夜お酒を飲みながらお気に入りの演目のDVDを見て、非日常にエスケープしています。

現在これといった趣味はないのですが、体を動かすことは大好きなので、週末はランニングやロードバイク、ヨガなどを楽しんでいます。他に好きなことといえば、美味しい食事と美味しいお酒をいただくことは外せません。グルメお取り寄せもしょっちゅうですし、美味しいお店の情報を聞けば、遠方でもトライします。おかげでエンゲル係数はかなり高いですが、美酒美食の追求は生涯学習の一環であり、出費は勉強代と勝手な理由をつけて納得しています。しかし、運動もしているし…と脳の欲するままに飲食していましたところ、4月の健康診断で糖尿病マーカーの一つが基

準値を超えました。さすがに20代でこれはマズイと反省し、最近は晩酌を醸造酒から蒸留酒に切り替えました（結局飲む）。

徒然なるままに書いてきましたが、肝心な仕事の話はまだしていませんでした。現在は、大学院に引き続き口腔解剖のベンチを使わせていただきながら、研究中心の毎日を送っています。木曜日は外来手術室の麻酔管理を担当し、少し臨床に携わる機会もいただいています。研究内容については前号にも書きましたので割愛しますが、テーマは末梢神経再生のメカニズムに関する研究です。神経研究において末梢神経はニッチな領域なのですが、まだまだ分かっていないことは多く、非常にやりがいのある分野だと思っています。大学院時代に、研究って面白い！と感じてこの道に進んだわけですが、思い描いた青写真のごとくサクサクと事は進まず、これを仕事として生きていくのはなかなか厳しい世界だなと痛感する毎日です。ただ、全ての原動力は「この事象が生じる原理を知りたい」という知的好奇心だと思っていますので、情熱を失わずに一步ずつ前進していきたいと思えます。

最後になりますが、まだまだ未熟者で至らぬ点が多いかと思いますが、今後も精進してまいりますのでご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。



口腔生命福祉学講座
助教

小田島 あゆ子

2016年8月1日より口腔保健学講座の助教を拝命いたしました小田島あゆ子と申します。素顔拝見ということで、どうぞよろしくお願いたします。

私は大阪で生まれ、5人兄弟の4番目として育ちました。3歳で大阪を離れ、その後は名古屋と東京を行ったり来たりして過ごしました。高校生

活は親元を離れて、当時大学生だった姉と一緒に暮らし、たくさん面倒をみてもらいました。そして、2005年に新潟大学歯学部口腔生命福祉学科の2期生として入学しました。大学生活は実習に部活にバイトと、とにかく忙しくて楽しかったです。ライブに行くことが中学生の頃から続けている私の唯一の趣味で、今でも大学時代の友達と一緒にいたりします。大学時代の友達とは音楽の話はほどほどに、「あの時のPBL班は〜だった」「実習でこんなことをやってしまった」など、だいたい大学時代の思い出話で盛り上がります。

口腔生命福祉学科を卒業後は口腔生命福祉学専攻修士課程に進学しました。大学院進学のきっかけは4年生の特別養護老人ホームでの福祉実習です。入所者の方へ食事介助がうまくできず、摂食嚥下や口腔ケアの知識と技術を学びたい、研究をしてみたいと思ったのがきっかけでした。摂食嚥下リハビリテーション学分野の先生方には恵風園の往診や修士1年目の臨床で、福島正義先生には修士・博士の研究でご指導いただきました。臨床も研究もよくわからなかった私に対して、一から丁寧に教えていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。修士2年目からは社会人大学院生に移行して、昭和大学に入職し、小児歯科に配属されました。小児歯科では保健指導、フォーハンドアシストの診療補助が業務の大半を占めており、歯科衛生士の3大業務（保健指導・予防処置・診療補助）の基礎を学ぶことができました。大学病院では異動することも多く、専門性を極めることが難しいと悩む時期もありました。しかし、小児歯科、障害者歯科、病院歯科（口腔外科）、特別養護老人ホームの訪問歯科診療などの様々な経験は、生涯を通して口腔の健康を支援することの重要性を学ぶ貴重な機会だったと思います。また、大学・病院ともに多職種連携教育に力を入れていたので、色々な職種と連携することの大切さや難しさを経験することができました。これは私の中でとても大きな課題です。

教員として口腔生命福祉学科に戻ってからは、今までの経験を教育・研究・臨床に活かすことができず、もっと深く追求できないかと日々試行錯誤しています。1つ1つの出会いを大切に

ながら大学でお仕事させていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。



小児歯科学分野 助教

黒澤美絵

はじめまして。2016年9月より小児歯科学分野の助教を拝命いたしました黒澤美絵と申します。この度、素顔拝見のお話をいただきましたので、簡単に私の自己紹介をさせていただきます。

生まれは埼玉県本庄市で中学校までを過ごしました。「本庄早稲田駅」と聞けば、知っている方もいらっしゃるかもしれませんが、群馬県との県境にある片田舎ではありますが、かの有名な早稲田大学の付属高校があることが唯一の(?)セールスポイントで、気が付けば駅名にもなっていました。あともうひとつ、ガリガリ君の生産工場があることも市民の自慢になっています。高校は都内に進学したため、夢の東京生活とおのぼりさん気分で上京したのですが、池袋のど真ん中にある高校にもかかわらず、「寄り道禁止」という禁欲生活をしいられた3年間でした。そして新潟大学への進学を期に新潟へ移住し、現在に至ります。もう人生の約半分を新潟で過ごしていることに自分でも驚いています。以前は「いつになったらこっちに戻ってくるんだ?」とことあるごとに聞いてきた両親も最近では諦めモードに入ったようです。

中学時代は剣道部に所属し、毎日大汗をかきながら活動していました。剣道の経験などまるでなかった私ですが、友人と「なんかかっこいいよね!」と盛り上がり、勢いで入部したというのが正直なところ。3年間でなんとか初段を取ることができました。結局、人生で剣道をしていたのはこの3年間だけで、実家に帰省すると今でも防具一式が目立つ場所に鎮座しています。高校時代は書道部に所属しました。中学校まで趣味で書道教室には通っていましたが、展覧会に出品するために期限に追われる書道部は運動部並みに厳しかったような気がします。改めて振り返ってみ

すと、どうやら私は「道」のつくことが好きなようです。

大学時代は普通の歯学部生のような学生生活を送っていました（…と自分では思っています）。歯科総合診療部での研修医時代に、「仕事に専門性を持ちたい、もっと学びたい」と思い、大学院進学を考えました。小児歯科にはもともと興味があり、選んだ理由はいろいろとありますが、研修医時代にペアを組んでいた友人が小児歯科に進学することが大きかったように思います。実際に入局してみて感じたことは、小児歯科は無限の可能性を秘めているということです。

大学院時代の研究は微生物感染症学分野にお世話になり、小児が罹患する細菌性咽頭炎の原因菌の病原因子に関する研究で2015年度に学位を取得させていただきました。新生ラボということで少々不安もありましたが、体育会系の部活のような明るい雰囲気、楽しく過ごさせていただき、それによって今の自分があると感じております。

現在は日々、成功と失敗を繰り返し、それによって新しい発見をするということの連続で大変ではありますが、非常に充実した毎日を過ごしています。

最後になりますが、ここまで稚拙な文章にお付き合いいただき、ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。



総合診療部を経験して

歯科総合診療部を経験して

歯科総合診療部 研修医 白 柏 麻 里

平成29年3月に日本歯科大学新潟生命歯学部を卒業し、4月から歯科総合診療部Aコースにて研修をさせていただいております。

今回、他大学出身である私が本大学で研修をしようと思った理由や研修生活の毎日について述べさせていただきます。

まず始めに、私が新潟大学での研修を選んだ理由を述べたいと思います。本大学における臨床研修の最大の特徴は、診療参加・実践型で行われているということですが、私はそこに大きな魅力を感じました。研修の一年間で、できるだけ多くの診療に積極的に携わり、早くスキルアップできるようになりたいと思っていたので本大学での研修を選択いたしました。また、生まれ育ったこの新潟の土地で歯科医療に貢献したいという思いも強かったので、迷いはありませんでした。

実際に研修生活が始まると、新しい環境に慣れるまで少し時間がかかったように思います。カルテの入力方法や器具の場所はさることながら、総合病院ならではの広大さに圧倒され、ごく最初の頃は病院内で迷うこともありました。また、学生時代に自ら治療を経験する機会が少なかったため、診療を開始したばかりの頃は不安と緊張感ばかり抱えていました。しかし、指導医の先生をは

じめとする総合診療部にいらっしゃる先生方の存在は大変心強いものでした。指導医の先生とは一対一で患者さんの治療方針・治療計画の立案をすることができ、いつも的確なアドバイスをしていただけるので感謝しています。また、信頼できる研修医の先生とペアを組めたことで日々の診療がスムーズに行えていると思います。

技術的にも知識的にもまだまだ未熟だとは思いますが、歯科医師としての第一歩を踏み出したからには、何事にも全力で取り組んで参ります。一人一人の患者さんに親身になって向き合い、一口腔単位に留まらず、身体的・精神的な面も含めて診療をしていきたいと思っております。患者さんの抱えておられる様々な思いを受け止め、不安を取り除き、心から安心して医療を受けられる場を提供できるような歯科医師になるため、日々精進して参りたいと思います。



専門診療科を経験して

歯学科47期 研修歯科医 中村 彬彦

本大学の研修はA・Bの2コースであり、Aコースの先生は総合診療室での研修を、Bコースの先生は各専門診療科での研修を行います。総合診療室では2人1組になり患者を1年通して診ていきますが、対象疾患は専門診療科とは異なり、歯科全般。身につく力は無限大。その人のやる気と努力とセンスによります。そんな私はBコース。研修先は専門診療科です（半年間）。専門診療科でなにをやるのかというと主にその科名の示す通り。それは義歯であったり矯正であったり外科だったり人それぞれ。私は口腔再建外科に4月から9月まで研修させていただくことになっています。簡単ではありますが、これから私の研修内容と日々の生活とをお話しさせていただきます。

1週間の内容をざっくり言うと、火曜日と金曜日に手術を、それ以外の日に外来診療・小手術を行っています。手術日は手術があれば助手としてチームに加わり、外来日は指導医と共同で診療を行います。診療補助の場合もありますし、実際に処置（抜歯や生検など）を行わせてもらうこともあります。指導医が不在の日や外来予約のないときは新患担当の先生から簡単な症例を回してもらいます。外科と他の専門診療科との差別化を図るならば、外科の特殊性は外来の仕事に加えて病棟業務がある点です。簡単に言うと入院患者がいる、ということ。外来の前、合間、後に病棟処置

を行います。従って私の1日は病棟から始まり、病棟に終わります（私の場合は土日祝日関係なく、必ず一度は患者さんの顔を見てお話するようにしています）。土日祝も病棟に行くなんて多忙で自由に使える時間が少ないのでは、と考える人（主に学部生）がいるかもしれません。労働条件通知書によると、始業は8:30、終業は17:15。つまり17:15過ぎれば遊んでも問題ない、ということになります（契約上では）。週1回以上の筋トレと週2回以上の部活と週1回以上のお楽しみ会をノルマにしている私としては、翌日以降の自分とトレセンの閉館時間と部活の終わる時間と相談し、仕事を切り上げる時間を決めます。遊んだあとは基本的に医局に戻り仕事をします。翌日の仕事に影響が出ない範囲で楽しむのが最大のミッションです。

忘れていましたが、専門診療科を経験して、学部生では学べなかった新しい知識との遭遇により日々、知的好奇心をくすぐられています、と最後にタイトル回収をして終わります。



新入生合宿研修を終えて

組織再建口腔外科学分野 片 桐 渉

平成29年4月8日（土）、9日（日）の2日間、新潟市西区のメイワサンピア新潟を会場に新潟大学歯学部新入生合宿研修が行われました。

あいにくの天候でしたが、少し遅めの桜の便りとともに編入生を含め、歯学科45名、口腔生命福祉学科26名、学生アシスタント6名、教員24名、職員3名での開催となりました。この研修は歯学部での生活をより多いものとするために、また、歯学に対する修学心を高め、教員、職員、同窓生およびクラスの仲間との交流・親睦を量ることを目的として企画されています。

私自身、他大学出身で新潟大学での新入生合宿研修は初めての参加でしたので事前に頂いたプログラムを見てその内容に驚くとともに、これまでに教職員の皆様が作り上げてこられたこの研修に大変興味深く参加させて頂きました。

第一日目からまだお互いの顔もあまり知らない参加者といきなりの合宿です。集合写真を撮影した後は、前田健康歯学部学部長のご挨拶、参加教員の自己紹介が行われ、歯学部のカリキュラムの説明、健康管理についてなど、これからの学生生

活の基本となる事柄についてガイダンスがありました。

その後、PROGテストが行われました。これは社会で求められる汎用的な能力・態度・志向である「ジェネリックスキル」を測定するもので、リテラシーとコンピテンシーの二つの観点から測定し、自身の現状を客観的に把握することを目的とするものです。受験が終わったばかりの新入生にとってここで社会人への第一歩を踏み出すことになるので、この結果は今後の参考になることでしょう。

午後からはいよいよアイスブレイキング、新入生同士での共同作業の時間です。あらかじめ決められた8～9名のグループに分かれ共通の課題に取り組みます。「砂漠に遭難した時にどうするか」という課題にグループで討論を重ね、解答を発表します。このころになると新入生たちも大分打ち解け、冗談を言いながらも真剣な議論を行う良い雰囲気が出来てきました。さらに「面接試験を再考しよう」ではK-J法の手法を用い、自身の受けた面接試験の質問内容を検討しグループごとにブ



ロダクトとして発表します。

夕食時には恒例の部活動紹介、食事後も教職員との懇談、深夜までロビーで話が盛り上がりました。

二日目は学生によるガイダンス、クラス幹事の選出、教員からの学生支援、セクハラについての説明の後、歯科麻酔科の瀬尾教授からBLS講習があり、グループに分かれ実習を行いました。

BLSを通し、医療人としての認識も深まったと思います。この二日間ではほぼ初対面であった参加者が一つの行動をとることににより絆が深まりこれからの学生生活に良いきっかけになったと思います。この合宿で体験したことを何かのタイミングで思い出して頂き、より実りのある学生生活にしてもらいたいと思います。



歯学部運動会を終えて

運動会実行委員長 歯学部歯学科5年 荒木望吏

「望吏さん今日無理じゃね？やだよおれ。」

と、当日の朝5時半部活の後輩からの電話です。私はちょうどグラウンドに着いた時で、言われた通りグラウンドのコンディションは最悪でした。前日に引いたグラウンドの線は無になっており、一緒にいたグラウンド係のチーフの表情も無になっていたのは印象的でした。しかし、当日まで5年生の各チーフを中心にみんな準備に要した時間は多く、先生方も参加していただけるのでぜひ開催しよう、いやなんといってもオールで夜通し遊んでいた部活の後輩を来させてよりしんどい思いをさせたいと強く感じ、運動会の実施に至りました。その後天気は回復して夏の陽ざしが射し、残った水たまりもドンキホーテで買った全然吸えない安いスポンジ布6枚だけで処理し、無事に開会式を定刻通り行うことができました。

開会式ではサッカー一部の1、2年生が「サイレントマジョリティー」を完全コピーしてくれ大いに盛り上がりました。特にすね毛まで剃ってくれていたところに一番感動しました。最近の部活でソックスを履くときに、微妙に生えたすね毛で足がチクチクするそうです。本当にすごくよかったです。

今まで誰にも言わずに秘密にしていた個人的に掲げていた今年の運動会のコンセプトは「HAPPY」でした。みなさん感じてくれましたか？わかんないですよ開会式の時に言えばよかったです。運動会初めての1年生も、今年から旭町キャンパスで「周りに何も無いけどこれ大学生活なの？」と驚きがちな2年生も、旭町キャンパス2年目で「え、こんなところに自転車屋さんあるんかい」と意外な発見をしがちな3年生も、…4年生も、実習とCBTに追われ「もうキャパオーバーです」と嘆きがちな5年生も、「…もうよくな？」と思い少し熱が冷めたのでしょうか数名だけ来ていただいた6年生も、全員が運動会を

全力で楽しんで夜の飲み会を終えた後の家のベッドで「ああ～わたしHAPPY」と言い残して寝て欲しいという想いです。具体的には以前の反省点を生かして、競技内容、競技ルール、当日のタイムスケジュール、最後の後片付けなど細かい部分を修正しました。

競技については、玉入れでは競技中に玉当て合戦してすごいジャレていらっしまった6年生（ハルキさんとナベさん）や、男女2人1組の大玉ころがしでは普段いきている女子が男子に置いてきぼりにされている姿や、14人15人脚では「え、おれこいつと足結んで肩組むんかい」と下を向いている男子や、20人リレーでは1位の5年生がこけ…これは言わない約束ですが、学校で見せないような白熱した様子をたくさん見ることができました。個人的には大縄飛びで、5年生が始めの2回でそこそこの記録を出して余裕こいてその後の残り1分間記録更新に挑戦せず突っ立ったままで、そのまま優勝できたのがいい思い出です。あれで負けていたらださすぎてみんなで休学届け書いていたと思います。みなさんどの競技においても全力で挑んで、それぞれ思い出深い競技もあったのではないのでしょうか。競技結果だけでなく、競技している仲間を全力で応援する、頑張った仲間を労うといったことがよりクラスの団結力を高めることに繋がったのだと思います。



クラスの団結力が高まるということは、なにごとにもみんなで協力できるようになる、一緒に試験勉強を頑張ることができるようになる、個人だけでなくクラスの成績が上がる、みんなで国家試験に受かりやすくなるということです。そうです、運動会は立派な国家試験対策なのです。このことを肝に銘じて家で一人勉強するのではなく、来年も再来年も運動会を休まず手を抜かず全力で取り組んでいきましょう。最後になりましたが、今年の運動会を無事開催できたのも先生方、生徒のみなさんの多大な協力のおかげです。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



歯と口の健康フェアを終えて

歯学科6年 小海由佳

去る平成29年6月4日（日）、イオンモール新潟南にて新潟市・新潟市歯科医師会主催の「歯と口の健康フェア」が開催されました。参加団体は主催団体に加え、県歯科衛生士会、市歯科技工士会、明倫短期大学、新潟大学歯学部で、本学からは辻村先生（摂食嚥下リハビリテーション学分野）と歯学科6年生10名が参加しました。

毎年様々なテーマでフェアが開催されており、今回は「歯と口からのアンチエイジング」というテーマでした。テーマの背景には急増する高齢者の健康寿命をサポートしていくために身体の健康を口腔の健康から支えることの重要性があります。

企画内容としてはそれぞれの参加団体がブースを設け、お口の体操、健口くんによる口腔機能測定、無料歯科相談、技工物製作の実演やパネル展示等でした。私たちと歯科医師会の先生とで作成したアンチエイジングクイズと称する歯科に関する質問を、来場者に回答していただき、その場で私たちが解説しました。その他にも歯科衛生士のブースや総合案内受付、呼び込み、来場者に配る風船の製作など裏方のお手伝いもしました。

フェア当日は親子連れからお年寄りまで様々な方にお立ち寄りいただきました。私が担当したのは、クイズのブース、歯科衛生士のブース、総合案内受付でした。現在、臨床実習の一環で総合診療部にて診療の一端を担わせていただいています。その中で、ご高齢の患者様とお話する機会が多いため、当日もご高齢の方に対する接し方やアドバイスの仕方は自然と行うことが出来ました。一方、子供やその親御さんとお話する機会は少ないため、親御さんの子供の歯に関する質問になかなか上手く答えることが出来ませんでした。このことは、自分の知識の偏りに気がつく良いきっかけとなりました。歯科医療従事者として

最低限知っておかなければいけないこと、説明出来るようにならなければいけないことが、まだまだ沢山あると感じました。

また、歯科に関するクイズの1つに“シーラントは虫歯を予防するための詰め物である”という質問がありました。多くの方が正解する中、一部の親御さんは“シーラント”という言葉をご存じではありませんでした。う蝕の罹患率の低い新潟県であっても、まだ知らない方がいらっしゃることに少し驚きを感じました。それと同時に、このフェアが歯科に関する予防や啓発活動の一端であることを感じた場面でもありました。

私は地域歯科保健活動に興味があり、以前にクラブ活動の一環として実際に参加したことがありました。その中で、歯科医師会の先生方と交流する機会もあり、先生方がどのように歯科に関する予防や啓発事業を行っているかを実際に見たい、知りたいという思いで今回のフェアに参加しました。このフェアを通じて当日の来場者だけでなく、開業医の先生方や技工士の方など様々な職種の方とも交流することが出来る非常に貴重な機会を得ることが出来ました。引率して下さった辻村先生や主催団体である新潟市、新潟市歯科医師会、その他の団体の皆様には大変感謝しております。



歯科衛生士のブースにて（筆者）

す。学内の臨床実習では経験出来ない貴重な機会をいただきました。歯学部生とはいえ、歯科医療に関わっている者として未熟で至らない点も多くあったと思います。しかし、この貴重な機会を先輩が経験し、様々なことを考え、見つめ直す機会として、今後もこのフェアに新潟大学歯学部として参加して行ってほしいと思います。



フェア終了後にて（本学からの参加者）



弓道部

歯学科4年 大野 晴日

こんにちは。歯学部弓道部主将を2017年度全歯体、オールデンタルまで務めておりました、歯学科4年の大野晴日です。この度は弓道部の紹介をする機会をいただき大変ありがたく思います。

弓道部は、男子部員8名、女子部員20名で活動を行っています。練習は週に3回、火曜木曜の17時～、土曜の10時～で楽しく弓をひいています。大会は8月のオールデンタルのほか、新潟大学の全学部の弓道部と争う春季・秋季学部戦、岩手医科大学・東北大学との交流戦である三大戦、医学科・保健学科と争うDM戦に参加しています。他学部に留まらず、他大との交流を増やすことができることも弓道部の魅力の一つです。また今年度の新しい試みとして毎月最後の土曜練に部内戦を企画したり、一回の練習量を増やすということを行ってきました。

新たな試みのかいもあって、2017年度オールデンタルでは、女子団体が第4位、男子団体が第8位、総合第7位、男子個人では歯学科5年の阿部大夢が第3位、女子個人では歯学科4年の寺門優希と歯学科3年の米山実花が予選突破を果たすことができました。近年では最も良い成績を残すことができたことを大変うれしく思います。うれし

い一方で反省点も多くあの試合でもう一中決めていれば…と悔しく思う場面もありましたので、来年度のオールデンタルでは今年度の反省点も生かし、よりよい成績を残すことができるよう練習に励んでいきたいと思っています。(今年度は毎回大会で多くの成績を残していますので、ホームページやTwitterをよろしければご確認ください)

弓道部は歯学部の部活の中でも歴史ある部活です。部活動以外の新入生歓迎会や追い出しコンパでは、OB・OGの先生方から今後の進路についてお話を伺ったり、実習において先生方の姿を拝見するだけで心強く感じたりと縦のつながりを感じることができます。

主将という責任の重大さに、私に務まるのか不安を感じておりましたが、6人の同期、頼りがいある後輩、そしてアドバイスを頂ける先輩・OBの皆さんのお力添えをいただきながら、これまで以上に新潟大学歯学部弓道部が発展していくように頑張ってきました。この夏、引退し後輩に幹部の仕事をすべて任せることとなりました。今までの先輩方が作り上げてきたこの部活を大切に守りつつ、新たな歴史を築き上げていってほしいと思います。



軽音楽部

歯学部4年 大久保 光

こんにちは。歯学部軽音楽部LIARSです。LIARSという聞きなれない部活名に戸惑われた方もいらっしゃるかもしれません。この部活名はOBの先生が当時好きだった小説から来ています。粋ですね。嘘つき達、という若干アンニュイな雰囲気のある名前とは裏腹に、部員は皆明るく仲良く元気よく、活動しています。

軽音楽は最近出来た部活の様に思えますが、実は新潟大学歯学部発足当時から存在する、歴史ある部活です。オリンピックの様に4年に1度開催されるOB会には毎回多くの先生方が遠方から駆けつけてくださいます。今回は、演奏していた音楽のジャンルがJAZZ、METALなど期によって異なるという面白い発見もありました。

そんなLIARSは今年なんと15名もの新入部員を迎え、総勢37名になりました。歯学部軽音楽部という名前ではありますが、医学部軽音楽部のMEDICSと兼部している部員や、オーケストラと兼部している部員も居ます。もちろん、歯学部の運動部と兼部している部員もたくさん居ます。門戸が広いのが我が部活の特徴です。気になった方はいつでも見学に来てくださいね。

さて、軽音楽部とは一体いつ、どこで活動しているのか。デンタルも無ければ試合も無く、毎週部員が集まる固定の部活日もありません。だから

と言って陰でひっそり息を潜めている訳ではないのです。年間を通して主に5回、ステージに立つ機会があります。6月の新歓ライブ、8月の夏合宿ライブ、10月の医歯学祭ライブ、11月の定期ライブ、3月の追いコンライブです。これらのライブに向けて、バンド毎に集まり練習しています。

バンドについては、はじめ入部と同時に学年バンドを組み、新歓ライブに出演するのが通例となっています。この学年バンドを皮切りに、好きなアーティスト、曲の趣味が合う者同士が自然と集まり、学年関係なくバンドを組んでいきます。夏合宿では曲の趣味も超越したシャッフルバンドを組みます。普段組まないメンバーでの演奏はとて新鮮で毎年面白い化学反応が起きます。

また、今年は初の試みとして、9月に全学の軽音5団体とMEDICS、LIARSが合同で出演する夏フェスが開催されます。元々5団体で開催されていたイベントに、今年初めて声を掛けていただき実現しました。絶対に面白い、熱量のあるイベントになると確信してLIARS総出で盛り上げたいと思います！

最後まで読んでいただきありがとうございました。LIARSの生態を少しでも知っていただけたら幸いです。



鶴保内閣府特命担当大臣の 歯学部訪問について

鶴保庸介内閣府特命担当大臣（沖縄及び北方対策、クールジャパン戦略、知的財産戦略、科学技術政策、宇宙政策）が平成29年6月11日の新潟大学訪問の際、歯科医学教育のニーズに対応できる教育設備の視察を目的に、歯学部の視察が行われました。前田歯学部長の歯学部概要説明の後、デンタルトレーナーシステムの体験（吉羽永子講師）、飲み込む機能の正常と異常（誤嚥）と地場産業との食品共同開発の講演（井上誠教授）、臨

床基礎技能実習室の視察および咀嚼能力測定の実演の視察（小野（高）教授）、ファントム実習室および電子ポートフォリオの視察（藤井教授、小田助教）が行われました。この様子は、内閣府のホームページ（http://www.cao.go.jp/minister/1608_y_tsuruho/photo/2017-035.html）ならびに文教ニュースでも紹介されました。



平成29年度 科学研究費助成事業の内定について

この度、平成29年度科学研究費助成事業の内定が行われました。歯学系および医歯学総合病院（歯科系）の新規採択率はそれぞれ37.7%、41.7%と全学の目標値である30%を大きく超えました。また基盤研究B以上の新規採択課題および新規＋継続採択課題の割合も歯学系では6.6%、17.9%と目標値の5%、10%を超えました。今年度は基盤研究（A）1件、挑戦的研究（開拓1件、萌芽2件）と新規採択がありました。基盤的経費の削減

が続く中、外部資金の獲得の重要性がますます高まっており、また平成30年度公募分から、科学研究費のシステム改革が本格スタートするため、常日頃の準備が必要となります。さらに、科学研究費助成事業の配分細目別トップ10ランキングでは、歯学系10細目中、トップテン入りしている細目は8に留まっており、ランキング外の2細目（機能系基礎歯科学、矯正・小児系歯学）のランキング入りが喫緊の課題といえます。

香港大学歯学部との 部局間交流協定の締結について

歯学部ではグローバル人材育成の目標の下、国際ネットワークの構築を進め、教員の学術交流、学生の交換留学を進めています。香港・香港大学歯学部（<http://facdent.hku.hk/>）から部局間交流協定締結の強い要望を受け、締結の可否について検討を進めてきました。この度、前田歯学部長、魚島副学部長（国際交流担当）が平成29年5月29日に香港大学歯学部を訪問し、Thomas

Flemmig学部長とともに部局間交流協定書に署名を行い、協定締結式を終えました。香港大学歯学部は世界歯学部ランキング（クアクアレリ・シモンズ [QS] 社）第1位にランクされ、またPBLチュートリアル教育でも有名な歯学部です。この部局間交流協定には学生交流に関する事項も含んでおり、教員のみならず学生レベルでの活発な交流が期待されます。



花田晃治名誉教授の叙勲について

新潟大学名誉教授 花田晃治 先生（元 新潟大学学長補佐、元 新潟大学歯学部長、元 新潟大学歯学部附属病院長）は平成29年春の叙勲で、瑞宝中綬章の栄に浴されました。先生のご功績として、矯正歯科学分野において、日本人の歯・顎の不正咬合に関して形態学的、組織学的、機能学的研究を通して、矯正治療の診断・治療に広く寄与し、特に日本人の顎変形症の「外科的矯正治療」に対する診断法・治療法を確立したこと、また多数の大学院生を育成し、門下生から3名の教授ほか多くの教育者と矯正歯科専門臨床医を輩出していることがあげられます。長年にわたって多くの優れた研究成果をあげ、教育にも並々ならぬ情熱を注いで後進の育成に努め、さらに管理運営面においても尽力し、大学の発展に寄与した功績は誠に顕著であることが評価され、この度の叙勲の栄となりました。花田先生のインタビュー記事は毎日新聞新潟版に掲載されました。(https://

mainichi.jp/articles/20170429/ddl/k15/040/150000c)。平成29年4月29日付発令。



歯学教育モデル・コア・カリキュラムおよび 歯科医師国家試験出題基準の改訂について

文部科学省は歯学教育モデル・コア・カリキュラム（平成28年度改訂）を、厚生労働省は平成30年歯科医師国家試験出題基準を公表しました。歯学教育モデル・コア・カリキュラム、歯科医師国家試験出題基準はそれぞれ6年、4年毎に改訂が行われていますが、今回がはじめての同時改訂となりました。そのため、縦のつながり（垂直的協働）、すなわち、モデル・コア・カリキュラム、歯科医師国家試験出題基準、臨床研修の到達目標の整合性が図られました。またともに、超高齢社会への対応が大きな改訂の柱となっています。

歯学教育モデル・コア・カリキュラムでは、診

療参加型臨床実習のさらなる充実に加え、横のつながり（水平的協働）として、医科との連携が図られるとともに、「歯科医師として求められる基本的な資質・能力」の実質化、臨床実習開始までの基礎模型実習を含めた技能教育に関する学修目標が新設されました。

また歯科医師国家試験出題基準の改訂では、出題項目の大括り化、包括化が進められるとともに、将来を見据え、社会情勢の変化に合わせて、高齢化等による疾病構造の変化に伴う歯科診療の変化に関する内容、地域包括ケアシステムの推進や多職種連携等に関する内容、口腔機能の維持向

上や摂食機能障害への歯科診療に関する内容、医療安全やショック時の対応、職業倫理等に関する内容の充実が図られました。

これら二つの改訂に伴い、歯学部では各分野に対して、教育内容の見直しを依頼しました。なお、これらの改訂版は、それぞれ、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1325989_29.pdf、<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000163627.html>から、ダウンロードできます。

[mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1325989_29.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1325989_29.pdf)、<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000163627.html>から、ダウンロードできます。

新潟高等学校特別講義の開催について

新潟県立新潟高等学校は、「歯学に関する専門知識を得、医療に関する視野を広げる。最先端の研究や技術の息吹に触れ、学習意欲を高める」ことを目的として、「新潟大学歯学部見学」を実施しています。今回、平成29年8月3日に、同校理数科メディカルコースの高校2年生51名ならびに教諭2名の訪問がありました。宮崎秀夫教授の挨拶の後、微生物感染症学分野の寺尾豊教授による「口の健康と微生物学：観て考えて」、摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授による

「摂食嚥下障害とその治療」の2つの模擬講義が開講されました。また、新潟高等学校出身で新潟大学歯学部歯学科を卒業し、現在、臨床研修医として診療に従事している3名の若手歯科医師から、なぜ歯学部に進学したか、大学生活や将来の夢などについて話がありました。高校生たちは、講義や高校OBとの懇談を通して、自分の進路や適性について深く考え、将来、医療職を目指す気持ちを新たにしました。



平成29年度 オープンキャンパスの開催について

8月9、10日の両日、新潟大学オープンキャンパスが開催されました。当日、台風5号の影響が

残る中、県内外から250名を超えるの参加者がありました。小野（和）副学部長による全体説明、

◆
◆
瀬尾入試委員長による入試説明、摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上教授による模擬講義、



卒業生による学部紹介、施設等見学が行われました。



歯学部納涼会の開催について

恒例の歯学部納涼会が7月19日（水）にホテル日航新潟で開催されました。この会は数年前までは教授会納涼会として開催されていたのですが、准講会、助教会の先生方、さらには大学院学生にも参加を呼びかけ、本年は総勢106名の参加

者となりました。教員、大学院生の親睦を深めるため席順は抽選とし、短い時間ながら職種を超えた会話が進み、有意義なひとときを過ごすことができました。



第1回D³研究交流会の報告

微生物感染症学分野 寺尾 豊

『歯学部ニュース 平成28年度第2号』の“総務委員会だより (22頁)”からのバトンを受けて報告いたします。平成29年1月24日(火)、新潟大学駅南キャンパスときめいとにて、「第1回D³研究交流会」を開催いたしました。『D³』の会名は、参加母体の新潟大学歯学部 (Faculty of Dentistry Niigata University)、デンカ株式会社 (Denka Co., Ltd.)、ならびにデンカ生研 (Denka Seiken Co., Ltd.) の組織名イニシャルに由来しています。さらに、これら3組織が単に和合するだけでなく、相互に刺激し合い高め合うベンチマークな関係が築けるように願いを込めて、相乗効果を表す乗算記号を附して完成させました (図1)。

さて、そもそもの始まりですが、平成28年7月20日に、新潟大学とデンカ株式会社ならびにデンカ生研は、包括的な産学連携推進に関する協定を締結しました。幅広くメディア報道もされましたので、各種媒体でニュースを見聞きした方も多いと推察いたします。同協定の目的としましては、「相互に緊密な連携協力を推進することにより、技術開発や事業化を加速させ、学術研究の振興・人材の育成・相互の発展・社会及び地域への貢献

を図ること」が掲げられています。さらに、特定の研究室単位での小規模かつプロジェクト期間に限定した共同研究等ではなく、より発展した大規模で中長期的な関係を目指しています。これら協定の背景と歯学部で現在取り組んでいる「若手中心のレジリエンスな融合研究」の主旨が合致したことから、他部局に先駆けて上記3組織の研究交流会を行う流れが醸成されてきました。

11月になり、D³研究交流会の企画が始まりましたが、立ち上げ背景から、主役は各組織の若手となることが既定路線となりました。そして、デンカ株式会社ならびにデンカ生研の協定担当者から、「点と点ではなく、面と面で」というアイデアが出てきました。つまり、単一の研究課題やキーワードを基に研究交流会を開催するのではなく、複数のキーワード研究を3組織が持ち寄り、縦横にアイデアネットワークが架橋していくことを目指すことになりました。古来より、「言うは易く行うは難し」とされますが、歯学部若手に交流課題を募りますと、都合15もの研究テーマが集まってまいりました (図2)。若手のそれぞれが綺麗で分かりやすいポンチ絵を作成してくれたこともあり、デンカ株式会社ならびにデンカ生研の若手も呼応するかのよう交流課題を挙げてくれました。



図1



図2

当日プログラムは、「高齢者の誤嚥」、「口腔と全身の感染制御」、「組織の再生と再建」の3つの面となる発表セッション3部で構成しました。1部1部のセッションは、それぞれ複数の組織から発表者を組み込みました(図3)。全員が魅力的なプレゼンテーションを心掛けてくれましたので、参加者も笑顔で惹き込まれるように聴講していたように感じられました(図4)。さらに、発表セッション後には毎回フリーディスカッション枠を設けたことで、確保していた30分の緩衝時間さえオーバーするほどの熱い交流ができました(図5)。最後の情報交換会の頃には3組織の垣根が消え、若手間の冗談や共同研究のアイデアも交わされていました。本稿のタイトルにも第1回と記しましたが、自然と第2回への要望が高まり、次回はデンカ生研の所在地で行うムードになっています。各分野の教授の先生には、1月24日も参加若手の診療や授業調整で大変お世話になりました。これからも継続的にご協力を仰ぐことになりそうですが、引き続きのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

前号誌面の都合で号を跨いでの掲載となるようですが、その間にデンカ生研から個々のプロジェクトへ連携の申し入れがありました。無事にD³が軌道に乗りそうな旨を追記し、本稿を終えます。



図3



図4



図5

花田晃治名誉教授 瑞宝中綬章を受章

新潟大学大学院歯科矯正学分野 齋藤 功

本年4月29日付で、新潟大学名誉教授（新潟大学歯学部歯科矯正学講座前教授）花田晃治先生が瑞宝中綬章を受章されました。受章理由は、長年に渡って教育、研究、臨床、管理・運営を主体とした公的功績が高く評価されたことと伺っています。5月12日、奥様とともに皇居において天皇陛下に拝謁し勲章を授与されました。当分野の前任教授で、歯科矯正学・矯正臨床の師匠でもある花田先生が叙勲を受けられたことは教え子の一人として本当に嬉しく思っているところです。

花田先生は、昭和38年3月東京医科歯科大学歯学部を卒業して同大学院に入学され、昭和42年3月歯学博士を取得された後、翌4月東京医科歯科大学助手歯学部任官しました。任官から1年10か月後の昭和44年2月、新潟大学講師歯学部附属病院として新潟大学に赴任され新潟での生活を始められました。新潟大学に赴任してからおよそ8年後の昭和52年11月新潟大学教授歯学部（歯科矯正学講座）に就任し、その後学内においては、昭和56年4月～60年3月新潟大学歯学部附属病院長、平成9年7月～13年3月新潟大学評議員、平成10年4月～11年3月新潟大学学長補佐、平成11年4月～15年3月新潟大学歯学部長、平成11年4月～13年3月歯学研究科長、平成13年4月～14年1月医歯学総合研究科副研究科長、平成14年2月～15年3月医歯学総合研究科長をそれぞれ歴任されました。新潟大学定年退職後、学校法人明倫学園明倫短期大学に赴任し、明倫短期大学学長として、歯科技工士、歯科衛生士、言語聴覚士の養成に尽力し、名誉教授を授与され顧問として現在に至っていらっしゃいます。

学外においては、文部省・文部科学省関連では、学術審議会専門委員（科学研究費分科会）、歯学視察委員、大学設置・学校法人審議会専門委員（大学設置分科会）、医療系大学間共用試験実

施評価機構CBT歯学系問題作成分科会委員・問題評価分科会委員、厚生省・厚生労働省関連では、長年に渡る歯科医師国家試験委員をはじめとして身体障害者福祉審議会委員、医道審議会専門委員、疾病・障害認定審査会委員（身体障害認定分科会）などを務められました。また、新潟県社会福祉審議会委員、同審議会専門分科会審査部会委員、新潟県歯科保健協会理事・よい歯の学校運動審査委員、新潟市社会福祉審議会委員を担当され、福祉面を中心に地域貢献も果たしてこられました。さらに、学会学術活動においては、日本矯正歯科学会会長・理事、日本口蓋裂学会理事・評議員、日本顎変形症学会理事・評議員、日本歯周病学会理事・国際交流委員、日本歯科医学教育学会理事・常任理事、日本歯科医学会理事・常任理事をはじめとして多数の学術団体において要職を歴任されるとともに、上海口腔医学国際編集委員、American Journal of Orthodontics & Dentofacial Orthopedics/Reviewerを務めて



おられます。こうした活動が認められ、日本歯科医学会会長賞、日本矯正歯科学会賞、Award of Special Merit, Charles H. Tweed International Foundation for Orthodontic Research, U.S.A.を受賞されています。

このように、学内外の様々な領域において枚挙に暇がないほどの活動、貢献をされてきたことからすれば叙勲に至ったことは至極当然のことと拝察いたしますが、同時にやはり超人であったこと

を再認識した次第です。受章後にお話しする機会がありました。その際「歯科医師としての出発点は東京医科歯科大学であったが、新潟大学に赴任し、その名誉教授として受章できたことはこの上ない喜びである。」と語っておられたことは印象的でした。今後とも歯科矯正学を含む歯学領域での様々な取り組みに対し、大所高所からご高批いただければ幸いです。この度の受章、誠におめでとうございました。



学会受賞報告

2015年度日本歯周病学会誌賞

2015年度日本歯周病学会誌賞を受賞して

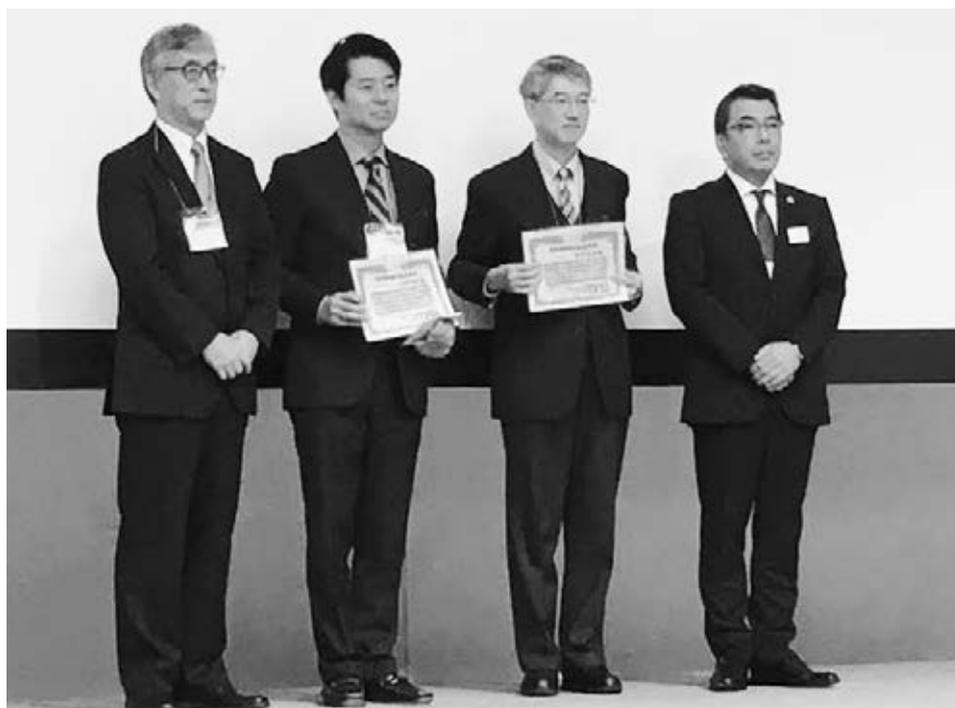
新潟大学医歯学総合病院 歯周病科
新潟大学大学院医歯学総合研究科 歯周診断・再建学分野
久保田 健彦

このたび2015年度日本歯周病学会誌賞を受賞（授賞式：2016年度秋季日本歯周病学会・新潟）いたしましたのでご報告させていただきます。前号で、日本歯科保存学会誌賞について報告しましたが、幸運なことに同年に掲載された2編の論文がそれぞれ年間最優秀論文に選ばれたことはとても光栄に嬉しく思います。日本歯周病学会は、会員数1万人を超える1957年創設の歯周病学に関する歴史ある学会で今年60周年を迎えます。本賞は、2003年度に当講座の島田靖子先生が受賞され

ていますので、2人目の受賞となります<http://www.perio.jp/member/award/journal.shtml>。

受賞論文は“SPT期におけるテトラサイクリン・エピジヒドロコレステリン含有軟膏の塗布塗擦の有効性評価—予備的検討—”と題しまして、全文を“https://www.jstage.jst.go.jp/article/perio/57/1/57_30/_pdf”でご覧いただくことができます。

本研究の特色は、歯周病専門医資格を有する開



表彰式にて：和泉理事長・受賞者・プレゼンターと

業3 歯科医院及び製品を開発・販売する日本歯科薬品株式会社との臨床産学共同研究であることです。昨今、特定機能病院かつ教育病院である本学病院では専門外来の典型歯周炎患者は減少しており、全身疾患など様々な事情で臨床研究協力患者リクルートが難しくなっております。一方、科学研究のバックグラウンドを有する歯周病専門医とのコラボレーションは、将来的に臨床研究モデルになるかもしれません。

製品の薬効を評価する研究では、プラセボ薬の提供など企業協力は不可欠ですが、一方様々なバイアスを避ける必要が有ることは言うまでもありません。よって本研究でも非常に厳しいダブルブラインドの実験デザインを必要としました。

これまで歯科臨床で用いられている抗生物質含有軟膏は、歯周ポケット内に投与するミノマイシン製剤をはじめ幾つかはその有効性が示されています。しかしながら、1950-60年代より使用されてきている抗生物質・あるいは抗炎症物質含有製剤の塗布・塗擦用法で、果たして歯周炎の臨床的改善・細菌・生化学的バイオマーカーに影響をあたえるのか?については、実はこれまで科学的なエビデンスはありませんでした。細菌性プラーク

が歯肉炎の原因であることがわかったのが1965年ですから、その前から経験的に使用されていたということになります。

結果は、抗生剤テトラサイクリンに抗炎症薬であるエピジヒドロコレステリンを含有する軟膏4週間の使用により炎症の強い(歯肉炎指数2以上)歯肉に対して、1週後の歯周ポケットからのプロービング時の出血(BOP)を有意に減少させるという結果を初めて得ました。同時に評価した臨床・歯周病原細菌マーカー・歯肉溝滲出液中の炎症性サイトカインやコラゲナーゼ等では有意差には至りませんでした。プラセボと試験薬は全く区別がつかないダブルブラインドを用いた研究結果として高く評価していただいたものと思います。

最後に、患者さんのご協力が必要なヒト臨床研究は、個人差の影響もあり標準化した研究がとても難しい中、本研究結果が評価され受賞に至ったことはとても嬉しく、共同研究者である吉江教授をはじめ、忙しい中何度もミーティングに来てもらいご協力いただいた田井秀明、村田雅史、百瀬学各先生そして関係各位に感謝致します。本当にありがとうございました。



受賞後に 共同研究者である歯周病専門医 田井・村田先生と

平成28年度新潟歯学会学術賞を受賞して

歯科矯正学分野 北見 公平

この度、平成28年度新潟歯学会において、学術賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。今回受賞した演題名は「がん抑制遺伝子BRCA1は顎顔面骨の形態形成に必須である」です。

すべての先天奇形のうち、およそ三割もの割合で顔面領域に異常が見られると言われていています。顔面の支持組織である頭蓋顎顔面領域の骨は神経堤細胞由来であり、中胚葉を由来とする全身の骨とは発生学的な起源が異なります。したがって、頭蓋顎顔面の骨形成異常は、胎生期における神経堤細胞の異常に起因していると考えられます。近年の大規模なプロテオーム解析により、DNA損傷修復機構が胎児発生過程において重要な役割を演じていることが報告されています。マウスを用いた実験においても、小顎症を呈するトリチャーコリンズ症候群の原因遺伝子がDNA修復機能に関与していることが示唆されています。しかしながら、DNA修復機能がどのように頭蓋顎顔面の形態形成に関与しているかについて、基礎生物学的に明らかにした研究はありませんでした。そこで本研究ではDNA修復機能に重要な働きをしているがん抑制遺伝子BRCA1に着目しました。マウスを用いて神経堤細胞特異的にBRCA1遺伝子を欠損するモデルを作製し、頭蓋顎顔面領域の骨形成異常について解析をしました。その結果、神経堤細胞由来の骨芽細胞におけ

るDNA修復機能の低下により、胎生期に自然発生するDNA損傷が修復されずに蓄積することで、細胞死の増加が引き起こされていることが示唆されました。本研究成果は、頭蓋顎顔面先天奇形の新たな病因論解明の基礎となり、今後の新たな診断・治療法の開発への発展が期待されます。

最後になりましたが、ご指導いただきましたテキサス大学医学部小児科の小松義広先生、生体歯科補綴学分野の加来賢先生ならびに齋藤功教授をはじめとする歯科矯正学分野の先生方に、この場をお借りして御礼申し上げます。



2016年度日本歯周病学会奨励賞を受賞して

高度口腔機能教育研究センター 高橋直紀

この度、福岡で行われました第60回春季日本歯周病学会学術大会におきまして、2016年度日本歯周病学会奨励賞を受賞いたしましたので報告させていただきます。

日本歯周病学会は、その名の通り、歯周病に関わる調査・研究を行っている学術団体であり、今や会員数は1万人を超える、日本の歯科関連主要学会の一つであります。また今年で学会創設60周年を迎える、大変歴史のある学会でもあります。今回受賞した日本歯周病学会奨励賞は、歯周病学の発展に寄与する学術論文を発表した若手研究者を表彰することを目的としたものです。

受賞論文は、以前から取り組んでいる、歯周病の病態形成における多刺激受容体TRPチャンネルの関与について報告したものです。歯周組織中に密に張り巡らされた神経線維上に発現しているTRPV1チャンネルタンパクに注目し、TRPV1を活性化することで産生される神経ペプチドCGRPが歯周組織局所での破骨細胞分化を制御することで、歯周炎の発症・進行に対して抑制的に働くことを明らかとしました。細菌因子が歯周炎の主な原因とする従来の病因論に捕らわれず、“神経系と骨代謝シグナリングのクロストーク”に注目して歯周炎の新たな病因論の基盤構築を目指した点において、評価いただけたものと考えております。

構造や活性化の違いにより計28種類のTRP

チャンネルタンパクが同定されており、近年、口腔領域における特定のTRPチャンネルタンパクによる唾液分泌や味覚、嚥下機能への関与が報告されはじめています。将来的にそれらの詳細が体系的に解明されれば、歯周病をはじめとする歯周疾患のみならず、摂食・咀嚼・嚥下機能などの口腔生理機能や口腔疾患の理解を深めるという学術的な波及効果を持つと考えています。

最後になりましたが、本研究遂行にあたり、ご指導を賜りました高度口腔機能教育研究センターの前田健康教授、口腔保健学分野の山崎和久教授、歯周診断・再建学分野の吉江弘正教授ならびに御協力頂きました全ての先生方に心より感謝申し上げます。



右から3番目が筆者

日本顎口腔機能学会第57回学術大会優秀賞 受賞報告

包括歯科補綴学分野 大川 純平

この度、平成28年10月に開催されました日本顎口腔機能学会第57回学術大会において、学術大会優秀賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。演題名は「二オイセンサによる嚥下後咽頭残留の推定」です。

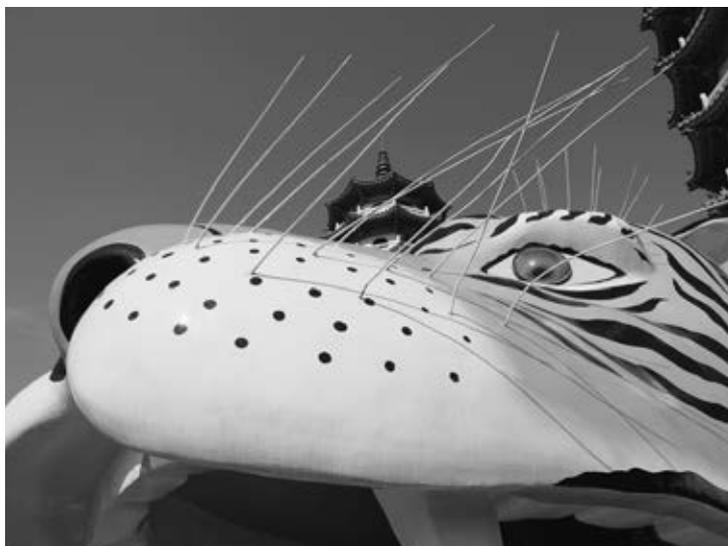
咽頭残留は、嚥下後の誤嚥の原因となり、誤嚥性肺炎を引き起こす可能性があります。咽頭残留の評価方法には、嚥下内視鏡検査や嚥下造影検査などが挙げられますが、いずれも画像診断による定性的な評価にとどまっており、簡便かつ定量的に評価する方法は確立されておりません。

我々は、食品摂取時において食塊の「香り」が鼻腔内に流れて感知される「レトロネーザル」という経路に注目し、咽頭残留から放出された香りを測定することによって、咽頭残留量の評価ができないかと考えました。そこで本研究では、嚥下

後咽頭残留をシミュレートした被験者において、鼻孔に設置した二オイセンサより得た香気量と咽頭残留量との関係を検討しました。その結果、咽頭残留量の増加に伴い、香気量は増加することが認められました。また、香気量の経時的变化から近似式を作成し、短時間で咽頭残留量を測定できる可能性を示しました。

本研究では液体の香料を用いているため、今後は種々の食品物性における香気特性を調べ、簡便かつ定量的な咽頭残留量の評価を行えるよう臨床応用を目指して研究を継続してまいりたいと思います。

最後になりましたが、今回の発表にあたり、ご指導いただきました小野高裕教授、堀一浩准教授、ならびに研究にご協力していただきました方々に心から厚く御礼申し上げます。



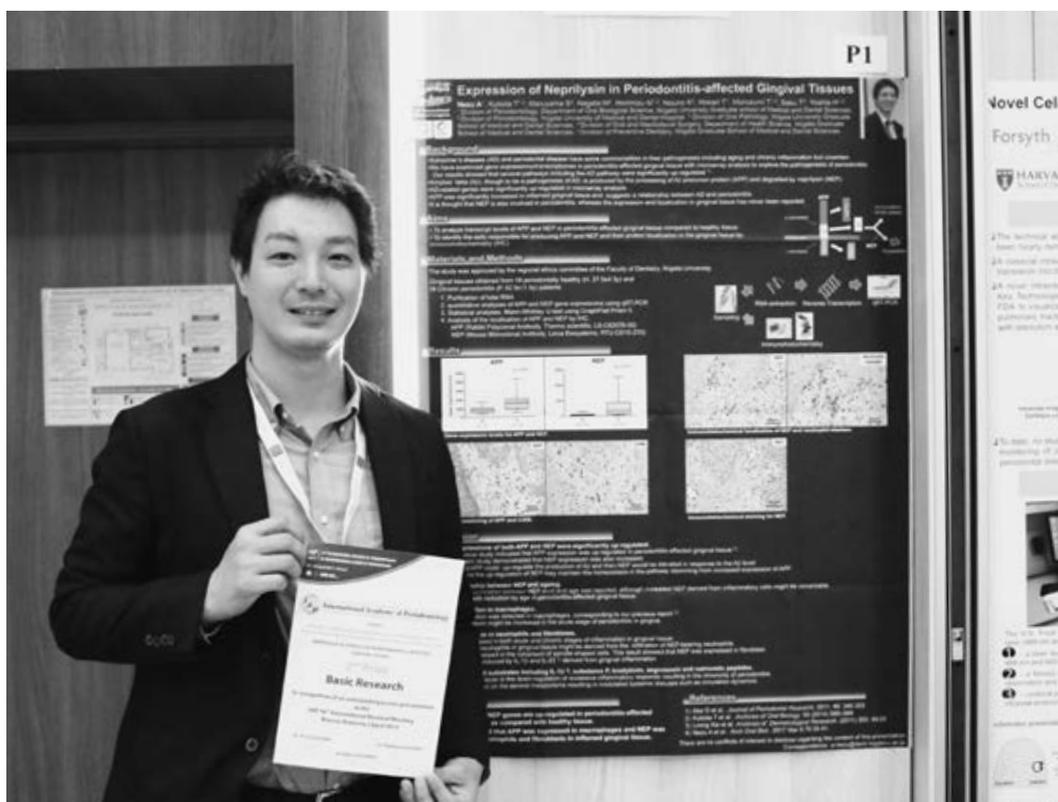
第16回国際歯周病学会学術大会 ベーシックリサーチポスター賞受賞

新潟大学大学院医歯学総合研究科 歯周診断・再建学分野
根 津 新

平成29年4月、ルーマニアのブラショフで開催された16th International congress of periodontology of the International Academy of Periodontology (IAP) にて、ベーシックリサーチポスター賞2位を受賞したので報告させていただきます。なお、本学会には当分野の久保田健彦先生（指導医）および堀水慎先生と3名で参加しました。

今回受賞した演題名は「歯周炎罹患歯肉組織におけるネプリライシンの発現」です。ネプリライシン (NEP) とは、アルツハイマー病 (AD) の

原因の一つとされるアミロイドβタンパクを分解する主な酵素です。またIL-1βなどの炎症性サイトカイン、アンギオテンシンなどの血管作動性ペプチドなど、多数の物質を分解・不活性化する事が知られています。本研究において歯周炎罹患歯肉組織中でNEPの発現が亢進したことから、歯周炎の病態形成や、ADまたは循環器疾患などの全身疾患と歯周炎との間にNEPが何らかの役割を演じている可能性が示唆されました。今後、NEPが歯周炎の病態を解明する一助となるかもしれません。(Ref URL ; <http://www.>



ポスター前にて

sciencedirect.com/science/article/pii/S0003996917300638)

本学会では世界中の歯周病学者および他大学の大学院生と交流を持つ機会がありました。彼らと知り合い様々な学会で再会する機会を得たことは、今後の歯科医師人生の大きな励みとなり、非常に有意義で貴重な経験となりました。

今回このような賞を頂くことが出来たことを大変光栄に思っております。最後に、ご指導頂きました吉江弘正教授（歯周診断・再建学分野）、久保田健彦先生、丸山智先生（歯科病理検査室）、永田昌毅先生（顎顔面口腔外科学分野）をはじめ、研究にご協力頂いた先生方に心より感謝申し上げます。



レセプションにてDr. Sculean（中央）および久保田先生と



会場にてDr. Offenbacher（左）およびDr. Van Dyke（右）と

第55回小児歯科学会町田賞優秀学会発表賞 受賞報告

小児歯科学分野 野上 有紀子

2017年5月に福岡県小倉にて開催されました第55回日本小児歯科学会大会にて「町田賞優秀学会発表賞」を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

この度、演題「我が国の口呼吸症候群小児は増加傾向にあるのか？」にて、咬合誘導関連の発表が選考対象となる町田賞を幸運にもいただくことができました。小児における口呼吸は、う蝕や歯周疾患、歯列咬合など口腔内への影響はもとより、鼻咽頭疾患等々へも影響を及ぼすとされていますが未だ不明な点も多いことから関連因子の抽出を行いました。小児歯科の臨床では、数十年前のう蝕の蔓延の収束以後、予防の観念に加え、健

全な歯列、咬合を育成するという概念が定着しました。小児期の「口腔」は、その後の心身へも大きく影響することから、口腔、身体、こころを育てる医療であり、小児の未来を担うと言われていきます。賞を頂き大変光栄に思うとともに、この賞に恥じぬよう今後さらに研鑽を積んでいかなければならないと思った次第です。

最後になりましたが、ご指導くださいました齊藤一誠先生はじめ、小児歯科学分野の諸先生方、本演題にて調査にご協力いただきました全国小児歯科開業医会の先生方にこの場をお借りして、心より感謝申し上げます。



平成29年度日本口蓋裂学会総会・学術集会 優秀ポスター賞を受賞して

歯科矯正学分野 北見公平

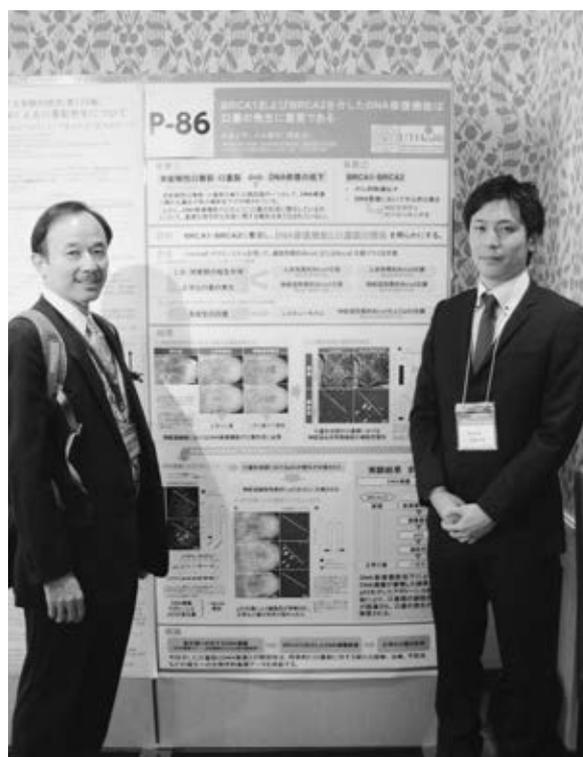
この度、2017年5月に東京で開催されました第41回口蓋裂学会総会・学術集会にて優秀ポスター賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

今回受賞した演題名は「BRCA1およびBRCA2を介したDNA修復機能は口蓋の発生に重要である」です。本研究は、私が大学院在籍中に留学先としてお世話になりました、テキサス大学医学部小児科の小松義広先生のもとで行っていた研究の一つです。

顔面領域に認められる先天異常の中で最も頻発する口唇裂・口蓋裂について、近年、DNA損傷修復に関わる遺伝子群の異常との疫学的関連性が示唆されていました。しかしながらそれに対する基礎生物学的報告はほとんどみられませんでした。これまで私たちはDNA修復機能に重要な働きをしているがん抑制遺伝子BRCA1に着目し、2016年11月の第75回日本矯正歯科学会において、神経堤細胞特異的にBRCA1遺伝子を欠損したマウスが口蓋裂を呈することを報告していました。今回の日本口蓋裂学会では、メカニズムの解析に加え、神経堤細胞特異的にBRCA2遺伝子を欠損したマウスも口蓋裂を呈することを報告しました。BRCA2とBRCA1はどちらもDNA修復に関わり名前は似ていますが、機能は全く異なる別の分子です。この二つの欠損モデルがどちらも同様に口蓋裂を呈することから、BRCA1 /

BRCA2双方が関与するDNA修復機構の口蓋形成における重要性がクローズアップされました。この二つのモデルを詳細に解析することで、より深いメカニズムの解明に近づくことができるかもしれません。

最後になりましたが、ご指導いただきました小松義広先生、ならびに齋藤功教授をはじめとする歯科矯正学分野の先生方に、この場をお借りして御礼申し上げます。



第41回日本口蓋裂学会総会・学術集会 優秀ポスター賞を受賞して

顎顔面口腔外科学分野 児 玉 泰 光



このたび、第41回日本口蓋裂学会総会・学術集会（2017年5月18-19日）において優秀ポスター賞を受賞致しましたのでご報告させていただきます。発表演題は「二段階口蓋形成術施行片側性唇顎口蓋裂児におけるHuddart/Bodenham Indexを用いた咬合評価」です。

一般的に二段階口蓋形成法（本法）は、手術による顎発育障害が少なく、良好な顎顔面形態に寄与する治療方針として知られています。今回、当科で1983年から行われている本法で治療された症例の咬合状態を検討するため、5歳前後の石膏模型から平行模型を製作し、Huddart/Bodenham Indexを指標に咬合評価を行いました。その結果、一段階口蓋形成法の症例と比べ、反対咬合の割合が極めて少なく、本法を採用している他施設との比較では、当科の症例は上顎歯列形態の水平方向の顎発育、とりわけ破裂側犬歯および乳臼歯

の咬合関係が良好となる傾向が示されました。この事は、混合歯列期や永久歯列期に行われる矯正治療の負担軽減や顎矯正手術の回避につながることを意味します。大変恐縮ですが、今回の受賞は当科の治療成績の優位性を改めて発信する良い機会になったと感じております。今後は、手術時期や手術術式と咬合評価との関連性を解析してゆきたいと思っております。

今回の対象症例は1996～2010年までに出生し、当科で加療した患児46名です。言うまでもなく、本研究は長年の資料採取と長期的な解析を見据えた資料管理なしには成立しない地道な研究です。私が入局する以前から治療に携わり貴重な資料を残してくださった諸先輩をはじめ、現医局員、関連診療科の皆様、そして、県内外から弛まず通院して頂いた患児とご家族に、この場を借りて心より感謝申し上げたいと思います。また、こうした研究を後輩達が継続できるよう、しっかりとしたりサーチマインドを持って口蓋裂診療に尽力したいと思います。

National Osteology Symposium JAPAN 2017 Excellent Clinical Research Awardを受賞して

新潟大学医歯学総合病院 歯周病科
新潟大学大学院医歯学総合研究科 歯周診断・再建学分野
久保田 健彦

このたび2017年6月3-4日、東京ソラシティカンファレンスセンターにおいて行われたNational Osteology Symposium, Research Poster CompetitionにおいてFinalist選出及びExcellent Clinical Research Awardを受賞させていただきましたのでご報告いたします。Osteology Symposiumとは、スイスのGeistlich AGにより設立された学術機関・オステオロジー財団<https://www.osteology.org/>主催の、その名の通り骨学に関するシンポジウムです。これまでルツェルン、カンヌ、モナコなど世界各地でInternational symposiumが、日本では2014年に初めてNational symposiumが開催され、2回目の開催でした。顎顔面領域及び歯周インプラントの骨・軟組織再生研究を臨床家・学術機関・企業間で推し進めるためのサポートを行っています。

本研究は、“Clinical outcome following

combination of periodontal regenerative therapies using a deproteinised bovine bone mineral, enamel matrix derivative with or without collagen membrane”と題しまして、重度慢性歯周炎患者に対する歯周再生治療の有効性・予知性：異種骨+エナメル蛋白のコンビネーション治療にコラーゲン膜が付加的効果を及ぼすか？について、通常の臨床指標に歯科用コービームCTによる骨組織体積評価を加え、12ヶ月予後を報告したものです。手術法の臨床比較研究は、ご存知のように患者の個体差や術者の外科スキルがデータに大きな影響を及ぼすことから、本研究では同一患者2部位（同一歯種・類似骨欠損）に対して、1名のSpecialistが標準化したスキルで全手術を行い比較・評価しました。社会人大学院生であった同期の根本康子先生と予防歯科濃野先生らとの共同研究です。40名の患者による既報（Nemoto Y, Kubota T *et al*,



授賞式：各賞受賞者・審査員と



共同研究者：根本・根津先生と

International Journal of Periodontics and Restorative Dentistry 2017, in press) でも、再生材料の複合治療法がこれまでの治療に比較してより良好な治療効果をもたらすこと、更には歯肉のバイオタイプ・厚みが十分な症例ではより膜の効果が歯周ポケット減少や付着獲得に有効であることを示しました。一方、今回9名18部位の対照研究でも、エナメル蛋白・骨補填材にコラーゲン膜を併用することにより、有意差には至らないもののエンドポイントである臨床指標（歯周ポケット減少・付着の獲得）、CBCT体積評価による骨充填率でもより良い傾向がみられ、先の研究結果の正当性を裏付けるものとなりました。

Poster Presentationは、すべて英語で！スペインのSanz教授をはじめ国内3大学教授の前で約20分行われました。その後厳しい？質疑応答で審査されました。研究内容だけでなくプレゼン力も重要だった気がします。17年前にGlasgowに住んではいましたが、久しぶりの英語での発表は緊張しました。ちょうど1ヶ月前に、ルーマニアのブラショフで行われた国際歯周病学会に出席

しており、指導大学院生の研究が2nd Basic Research Awardを幸運にも受賞したのですが、海外から帰国して間もなかったこともプラスだったかもしれません。私の他には、東京医科歯科大学と基礎では東京歯科大学の若手研究者が受賞されました。

本シンポジウムは、研究者にフレンドリーで、演題を採択されると通常5万円ほどかかる登録費も免除されますし、学会の内容は骨研究者だけでなく、臨床家にとっても、歯周病・インプラント・顎顔面疾患に関する最新で国際的なトピックスを学べるとても有意義なものです。今後も、国際大会や国内大会があると思いますので是非参加されてみてください。

最後に、臨床歯周病研究は、倫理委員会、研究デザイン、標準化、コスト、患者マネージメントなどハードルが高い中、本研究を計画・遂行し、結果受賞に至ったことは、吉江教授・根本先生、共同研究者をはじめご協力いただいた皆様のおかげです。心から感謝いたします。ありがとうございました。



平成29年度 日本顎変形症学会総会・学術大会 優秀ポスター賞を受賞して

歯科矯正学分野 阿 部 遼

この度、第27回日本顎変形症学会総会・学術大会において、優秀ポスター賞を受賞致しましたので、ご報告致します。今回受賞した演題名は「超音波診断装置を用いた個性正常咬合者と骨格性下顎前突症患者の嚙下時舌運動の比較」です。

これまで、骨格性下顎前突症患者の嚙下時における舌の動態解析の報告はあまりなされていませんでした。先行研究の、舌圧センサシートを用いた研究では、骨格性下顎前突症患者では、特徴的な嚙下時舌圧発現様相を示すことから、舌運動様態にも特徴が認められるのではないかとという仮説を立てました。そこで本研究では、骨格性下顎前突患者と個性正常咬合者を対象として、超音波診断装置を用い、ゼリー嚙下時の舌運動様態を測定し、比較検討しました。

その結果、骨格性下顎前突症患者では、上下顎

骨の形態的不調和により舌全体を口蓋方向に挙上させることに時間がかかること、さらに舌周縁部における特徴的な上下動を示す波形と嚙下時間の延長が生じていることが示唆されました。

今後は、術後における骨格性下顎前突症患者の嚙下時舌運動様態が、術前と比べ、どのように変化していくのかを縦断的に調べ、骨格性下顎前突患者の治療方針決定の補助、術後のMFT（筋機能療法）の必要性の検討等へ役立てていきたいと考えています。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました齋藤功教授、林孝文教授、福井忠雄先生、坂上馨先生、サポートしてくださいました小林太一先生、御意見をくださいました歯科矯正学分野の先生方に心より御礼申し上げます。



内閣官房/文科省/厚労省/農水省 AMR対策合同事業 優秀表彰 受賞報告

微生物感染症学分野 寺尾 豊

このたび、内閣官房等から『薬剤耐性（AMR）対策普及啓発活動表彰』を受けました。表彰式典は2017年6月末に内閣官房/文部科学省/厚生労働省/農林水産省の合同事業として開催され、日本科学未来館で表彰状を戴きました。

薬剤耐性（AMR）対策事業とは、2016年4月に内閣感染症対策関係閣僚会議において「薬剤耐性（AMR）対策アクションプラン」が採択されたことを受け、国を挙げて推進されているものです。サミットや国連総会での国際AMR政策のほか、医療系専門職・学生に対する普及啓発、国民の知識や理解を深める等の事業が省庁横断的に展開されています。

その中で、新潟大学歯学部微生物感染症学分野における先端研究と教育活動が共に評価され、今回の受賞となりました。学会や大学病院、企業等の組織規模ではなく、個人研究者としては唯一の受賞となりましたので、領域研究を牽引する気持ちで更なる飛躍を期したいと考えています。また、歯学科ならびに口腔生命福祉学科の学生さんには、今後も学修意欲と興味を喚起する微生物学授業を実施いたします。

各種省庁関係者による研究ヒアリング・授業視察・VTR撮影やメディア取材等では、学内関係者ならびに分野スタッフに協力をいただきました。本誌面を借りて御礼申し上げます。



日本科学未来館での表彰式。当日はパネル展示やタレントさんを含めたトークイベントも行いました（政府関係者の方、タレントさん達の仕事に対するプロ意識の高さに感銘を受けました）。



受賞者と4省庁の閣僚等の関係者の集合写真。宇宙飛行士の毛利衛日本科学未来館長を囲み撮影（筆者は前列左から2人目）。

新潟歯学会報告

平成29年度 第50回新潟歯学会総会報告

平成29年度新潟歯学会集会幹事
組織再建口腔外科学分野
船山 昭典

平成29年度歯学会の集会係は昨年度より引き続き、組織再建口腔外科学分野が担当させていただいております。

平成29年4月15日（土）に第50回新潟歯学会総会を例年通り、歯学部講堂で開催致しました。総会議事では平成28年度の会計決算報告および会計監査報告が行われ、今年度（平成29年度）の事業計画ならびに予算案が承認されました。平成27年度に創設された、新潟歯学会賞が歯科矯正学分野の北見公平先生に、新潟歯学会奨励賞が微生物感染症学分野の坂上雄樹先生にそれぞれ授与されました。総会議事終了後、6題の一般口演が行われました。口腔生理学分野教授の山村健介先生にご協力いただき、特別講演として九州歯科大学 口腔機能学講座 口腔保存治療学分野 教授 ならびに、九州歯科大学大学院歯学研究科長 北村知

昭先生を講師にお迎えし、「1 Upエンドドンテイクスとパラダイムシフト」と題するご講演をいただきました。

お忙しい中、座長をしていただいた先生方をはじめ演者の方々や参加して下さった会員の皆様のご協力により、第50回新潟歯学会総会を無事に終了できましたことを、この場をお借りして、皆様に厚く御礼申し上げます。

新潟歯学会に関する詳しい情報は新潟歯学会ホームページをご覧ください (<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>)。平成29年度第2回例会は、11月11日に歯学部講堂で開催予定です。平成30年度の新潟歯学会賞の応募締め切りは平成30年3月31日の予定ですので奮ってご応募下さい。

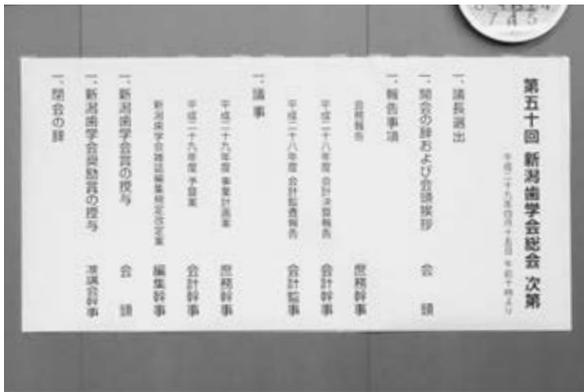


写真1：第50回新潟歯学会総会 次第



写真2：会頭 前田健康 先生 ご挨拶



写真3：北見公平 先生 新潟歯学会賞授与



写真4：坂上雄樹 先生 新潟歯学会奨励賞授与



写真5：北村知昭 先生 特別講演



写真6：特別講演 感謝状授与



同窓会だより

歯学科6年生、口腔生命福祉学科4年生と歯学部同窓会との交流会

渉外理事 池田 順行

平成29年4月20日（木）に「歯学科6年生・口腔生命福祉学科4年生と新潟大学歯学部同窓会との交流会」が開催されました。これまで交流会は9月頃に開催していましたが、試験や臨床実習が大詰めとなる秋口ではなく年度初めに開催してほしいとの学生の声があったことから時期を変更しての開催となりました。

まず歯学部講堂にて同窓会の説明会が行われました。有松美紀子会長の挨拶にはじまり、内藤義

隆専務理事から同窓会の説明がなされ、大墨竜也会計理事からは同窓会の入会案内があり、大島勇人総務理事および小田陽平総務理事からは同窓会に対する思いについての熱いメッセージが送られました。

続いて場所を歯学部アメニティスペースに移し、お酒も交えた懇親会が行われました。佐々木裕道副会長の乾杯の挨拶に始まり、1時間半ほどの歓談の時間はあっという間に過ぎ、野内昭宏副会長の挨拶にて閉会となりました。交流会では、同窓会は縦横を含めた仲間であるため卒業後に困ったときの頼りにしてほしいとのアドバイスがあり、卒業後は同窓会の一員として新潟大学歯学部同窓会をさらに盛り上げていただくようお願い



がありました。

新潟大学歯学部は、歯学科、口腔生命福祉学科ともに卒業生の人数も増え、全国各地で活躍している同窓生が多く居られます。今回の交流会が、最終学年の不安な時期である学生さんにとっての安心材料になれば幸いですし、新潟大学歯学部同窓会が新卒業生を加えさらに発展していくよう願っております。

第8回研修歯科医支援塾開催

準会員・研修歯科医支援部 部長
小松 康高

去る平成29年5月25日（木）に大学病院・アメニティモール1Fの研修室にて「第8回研修歯科医支援塾」を開催致しました。毎年、年1回、5月のこの時期に開催しており、今年で早8年目を迎えました。今回は17名の研修歯科医の皆さんが参加してくれました。研修歯科医の皆さんは、日々、臨床技術の研鑽に勤しんで、全力で頑張っている事かと思いますが、遠い未来に自分の歯科医師人生を振り返った時に、満足いくものとするためにも、自分の興味のあるものを見つけ、そして進路選択をしなければなりません。上級医や先輩、同期に相談し、アドバイスをもらいながらも、色々迷う事も実際は多いと思われるので、そこで少しでも参考になるような話を聞ける機会があればと思い、毎年この会を開催しておりま

す。
今回は、山本真也先生（歯学科38期生、新潟市開業、歯科・訪問やまもと歯科）と北見公平先生（歯学科40期生、新潟大学医歯学総合研究科 歯科矯正学分野）のお二人の先生をお招きして、講演をして頂きました。

山本先生は訪問診療をご専門にご活躍で、非常に熱く情熱的な先生です。今回の講演は、リンカーン大統領の名言「意志あるところに道あり」という言葉がまさにぴったりの内容ではなかったかと感じました。自分の興味のある事、やりたい事を見つけたら、その夢に向かってひたすら邁進するのみであり、一方で夢の実現のためには、何をすべきか？熱くたぎる情熱とは逆に、冷静で緻密な人生設計の必要性も講演の中でお話頂きました。

北見先生は、開業歯科医院勤務、留学、そして現在の所属である大学院と幅広くご経験があり、その多岐にわたる経験を皆さんの前でお話頂きました。勤務医時代のお話で、診療前の朝練と称し、形成、temporary crownの練習を日々されていたエピソードは、個人的にはとても印象的でした。日々の診療の中で自分に欠如しているものを探し、明確な目的意識を持ち、そのためには何をすべきか？それが今の大学院進学を決定づけたという経緯が大変良く分かり、研修歯科医の皆さんにとって、大変有意義な講演であったかと思えます。お二人の先生方には、この場をお借りして改めまして感謝申し上げます。





新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅢ「ダイレクトクラウンを用いた即日修復」を受講して

歯学科40期生 矢野 亜 糸

歯学科40期生 矢野亜糸です。このたびは上記セミナーを企画していただきありがとうございました。受講しましたので、その感想を書かせていただきます。

講演直後にご協力いただいたアンケートですが、講演内容：とても良かった（13名）、良かった（4名）、質疑応答：とても良かった（8名）、良かった（9名）と今年も例年通り好評の結果を頂きました。以下に、いくつか具体例を挙げます。

- ・ 将来の進路を考えるうえでとても参考になりました。
- ・ 開業、大学院勤務と2つの視点からのお話を伺うことが出来、非常に有意義でした。
- ・ 自分のモチベーションが上がった気がします。ありがとうございました。
- ・ 地域別の求人情報が知りたいと思いました。
- ・ 大学院での研究テーマの決定方法や、研究の成果が出るかどうかへの不安などが聴きたかった。
- ・ 研修医後のビジョンがあまり自分で想像できなかったが、今回のお話を聴いて大変参考になった。

今後、研修歯科医の先生方の進路の参考になるよう、ニーズを踏まえて内容をより充実させていこうと思います。また、これまでは、主に歯学科（研修歯科医）を対象に会を開催して参りましたが、今後は口腔生命福祉学科の皆さまにも、同窓会として支援できることがないか、同様な講演会など検討して参ります。ご意見、ご希望などいつでもお寄せ下さい。

3Mダイレクトクラウン（以下クラウン）はチェアサイドでできるハイブリッドセラミックスクラウンということで、発売当初から気になっていました。「リーズナブルに白い歯を提供」「One Dayで完結する歯冠色のクラウン修復」を可能にしたもの、とのこと。光重合型の歯冠用硬質レジンで、パッケージの中にペースト状の歯冠形態の付与されたレジン塊が入っており、それをチェアサイドで調整して、その場で装着しましょう、ということです。実際に触れたのは今回が初めてでした。小白歯はCAD/CAMが保険適応されているので、大白歯の、長期経過観察の歯、治療機会の限られた歯、いわゆる「訳あり」の歯が適応になりそうです。

講義のあとに実習があり、最初は直接間接法（シリコン模型上でクラウンを作製する方法）で小白歯を実際にやってみました。模型上の支台



 歯の高さ、近遠心幅測定、クリアランスの確認をして、取り出したクラウンにプローブでマーキング、と書くシンプルですが、やってみるとよくわからない。結局、その後、余剰レジンをトリミングして、内面を少し押し広げて模型上に圧接していくのですが、その時に確認しながら、切り足しが必要でした。内面拡大の際は隅角部、隣接部のレジンの厚みを薄くするよう「じわ～」と押し、内面に皺や空洞を作らないのが大切。圧接の際も思わず咬合面から押したくなるのですが、そこは我慢して、支台歯の軸面に沿わせて「すぽっ」と入る程度に。軽く対合歯を咬ませて偏心運動させて圧痕を付与。そのあとはマージン、カントウアー、隣接面形態、咬合面形態を調整していくのですが、講師の菅原佳広先生いわく「ここはしっかり時間をかけて」と。光照射し重合後は形態修正し、研磨、艶出しまでしました。休憩をはさんで、直接法を想定し、大白歯のクラウンの作製も同じ要領で行いました。



実際にやってみると、レジン塊の取り扱いには注意する点が多く、実際の患者さんに適応する場合、私なら、まずは直接間接法を選択します。ただこのクラウン自体「隙間を狙った」もの、とのこと。どうしても困ったときの手札の1つとして懐にしまっておこうと思いました。

最後に同窓会学術セミナーについて。久しぶりの母校は懐かしい顔がいっぱいで楽しかったです。ぜひ今後とも、知っておきたい、やっておきたい企画を期待しています。

新潟大学歯学部同窓会学術講演会 「現在の歯科を取り巻く“新興・再興感染症”」を受講して

歯学科46期生 田村 光

私は平成29年4月22日(土)に開催されました、新潟大学歯学部同窓会学術講演会にて寺尾 豊先生の「現在の歯科を取り巻く“新興・再興感染症”」をテーマとしたご講演を拝聴致しました。歯科と感染症について、特に薬剤耐性菌や誤嚥性肺炎の予防における口腔ケアの重要性など昨今の感染症に関する問題について歯科医師として貢献しうることについて学ぶことができました。

2015年5月WHOにて薬剤耐性に関する国際行動計画が採択され、日本でも厚労省から2020年までに抗菌薬の使用量を3分の2へと減らすことが目標とされています。薬剤耐性菌は「MRSA(メチシリン耐性黄色ブドウ球菌)」、「PRSP(ペニシリン耐性肺炎球菌)」、「MDRP(多剤耐性緑膿菌)」、「VRE(バンコマイシン耐性腸球菌)」など多くの耐性菌がありますが、特に「MRSA」と「PRSP」が感染の多くの割合を占め、重要視されています。これら耐性菌は抗菌薬の低濃度での使用により、完全に死滅させることができず、生存した菌が増殖することにより生まれます。今まで多くの医師や歯科医師が抗菌薬を多量に処方してきたことも原因の1つとされているそうです。



寺尾先生が行われた調査によると県内イオンモールのカートの手10000個を調べた結果「MRSA」が検出されたものはわずか2つであり、それは病院や診療所において「MRSA」が検出される割合と比較すると非常に少なく、いかに病院や診療所において「MRSA」が生まれているのかを示しているとおっしゃっていました。医師や歯科医師が耐性菌を生んでしまっているという面を大変実感するお話で、医療に携わる方々が協力して取り組まなければならないことであると感じました。

私自身はまだ経験不足であり、臨床の場においてどのように抗菌薬の使用を減らすことができるのか、わからないことも多いのですが、今回のお話を念頭に置いて学び、抗菌薬の処方や使い方を適切に判断できるようになりたいと思います。

また今日の高齢社会において死亡原因の大きな1つとして取り上げられることの多い誤嚥性肺炎についてもお話がありました。他の疾患で入院さ

れる際には院内感染および誤嚥性肺炎に備えて肺炎球菌ワクチンの接種が行われており、それによる発病の減少率が27%であったのに対して、単純比較はできないものの、口腔ケアによる誤嚥性肺炎の減少率は50%以上でありました。また、口腔ケアを行うことで術後合併症の割合も4分の1へ減少させることができます。口腔ケアにより致死的な肺感染症が予防されることは、患者さんのQOLおよび口腔衛生のモチベーションの向上につながり、歯科医療従事者においてもその活躍の場を広げます。そのため、口腔ケアの入院時の全身管理における有用性を歯科の立場からより明らかにしていく必要があると感じました。

今後自分自身、歯周病や肺炎など感染症について学び、研究を行い、ほんの少しでもその医療の発展に貢献できるように努力していきたいと思えます。

最後に、ご講演くださった寺尾先生、今回このような有意義な機会を与えていただいた、同窓会



学術委員の先生方に感謝申し上げます。誠にあり
がとうございました。

Ten minutes saves a life® ! 肌で感じました。

歯学科17期生 刈屋 功

5/28の瀬尾教授による救急蘇生の講演は、その質と量においていずれも素晴らしいものでした。実は私は、昔に染矢教授のもとで全身麻酔の研修を彼と一緒に受けていた事もあり、開業当初は、「CPRくらい出来るよ、ふん、ふーん。」で思っていました。しかし、違うのです。彼の講演を何回も聞くうちに自分の間違いに気付いたのです。

皆さん、現実の事を想定して下さい。自分の診療室に最初から心肺停止の患者様が来院することはあり得ません。99.9%の場合は患者様が来院してその後状態が急変し、歯科医師として対応することが必要になります。そのような時、「CPRくらい出来るよ、ふん、ふーん。」のレベルの知識では、まだ意識があり、苦しさを訴える患者様に適切な対応が出来ないのです。あたふたして、ただ手をこまねいているうち、心肺停止。さて、CPRをしよう。これではまずいのです。



午前の講義では、実際に歯科診療室で患者様が急変し、アメリカの歯科医が必死に対応している動画をスクリーンで拝見しました。可愛い女の子が、突然痙攣し手をこまねいているうちに呼吸停止と失禁、駆けつけた母親が傍で発狂してました。あと、デブの親父が冷や汗をかいて苦しんでいる急性心筋梗塞の様子など。とても演技とは思えない緊迫したリアルな描写に息をのみました。その為か、照明を暗くした講堂で居眠りしている参加者はいませんでした。

昼食後、バッグマスクとAEDを使ったCPRを「え？まだやるの？」というくらい練習して、参加の皆様は息があがっている様子でした。私にとっても、帰りに新潟駅周辺で美味しくビールを飲むのに十分な運動量でした。とても充実した日曜日でした。

最後に、瀬尾教授と歯科麻酔科のスタッフの皆様、企画準備をして頂いた同窓会学術の皆様に深く感謝申し上げます。



教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	29. 4. 1	米 田 博 行	包括歯科補綴学分野助教	
採用	29. 4. 1	山 田 友里恵	高度口腔機能教育研究センター特任助教	
採用	29. 4. 1	村 上 望	小児歯科学分野特任助教	医歯学総合病院医員
採用	29. 4. 1	山 鹿 義 郎	包括歯科補綴学分野特任助教	医歯学総合病院医員
採用	29. 4. 1	深 井 真 澄	顎顔面口腔外科学分野教務補佐員	
採用	29. 5. 1	渋 木 瞳	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手	
採用	29. 5. 1	坂 井 遥	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手	
採用	29. 5. 1	鈴 見 梨 沙	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手	
昇任	29. 5. 1	福 井 忠 雄	医歯学総合病院講師	歯科矯正学分野助教
採用	29. 5. 1	田 中 みか子	硬組織形態学分野研究支援者	
採用	29. 5. 12	桃 井 麻 未	摂食嚥下リハビリテーション学分野産学官連携技術者	
採用	29. 5. 18	葛 城 梨江香	口腔生化学分野研究支援者	
昇任	29. 7. 1	船 山 昭 典	医歯学総合病院講師	組織再建口腔外科学分野助教
採用	29. 8. 1	竹 井 絵 理	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手	

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
配置換	29. 4. 1	井 部 達 也	歯学部事務室長	財務部契約課副課長
配置換	29. 4. 1	吉 田 恵太郎	医事課専門員	歯学部事務室長
配置換	29. 4. 1	中 澤 典 子	歯学部事務室学務係長	総務部企画課評価総括係長
配置換	29. 4. 1	神 長 真 晴	学務部教務課教育実施係長	歯学部事務室学務係長
配置換	29. 4. 1	鈴 木 寛 則	歯学部事務室総務係主任	人文社会・教育科学系総務課庶務係主任
配置換	29. 4. 1	佐 藤 聡 子	医歯学系総務課学系企画係長	歯学部事務室総務係主任

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	29. 4. 1	長谷川 陽 子	義歯診療科講師	新規
採用	29. 4. 1	江 口 香 里	冠・ブリッジ診療科助教	冠・ブリッジ診療科医員
採用	29. 4. 1	須 田 大 亮	魚沼地域医療教育センター(歯科口腔外科) 特任助教	口腔再建外科医員 (パート)
採用	29. 4. 1	金 丸 祥 平	口腔再建外科医員	継続
採用	29. 4. 1	竹 内 玄太郎	口腔再建外科医員	魚沼地域医療教育センター特任講師
採用	29. 4. 1	佐久間 英 伸	口腔再建外科医員	新規
採用	29. 4. 1	竹 内 涼 子	口腔再建外科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	荻 野 奈保子	口腔再建外科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	原 太 一	口腔再建外科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	櫻 井 奈 苗	口腔再建外科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	遠 藤 諭	口腔再建外科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	千 田 正	口腔再建外科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	羽 賀 健 太	口腔再建外科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	齋 藤 太 郎	顎顔面口腔外科医員	継続
採用	29. 4. 1	上野山 敦 士	顎顔面口腔外科医員	新規
採用	29. 4. 1	新 垣 元 基	顎顔面口腔外科医員	新規
採用	29. 4. 1	山 田 瑛 子	顎顔面口腔外科医員	新規
採用	29. 4. 1	伊 藤 元 貴	顎顔面口腔外科レジデント	新規
採用	29. 4. 1	中 谷 暢 佑	顎顔面口腔外科医員(パート)	継続
採用	29. 4. 1	隅 田 賢 正	顎顔面口腔外科医員(パート)	継続
採用	29. 4. 1	北 村 厚	顎顔面口腔外科医員(パート)	継続
採用	29. 4. 1	木 口 哲 郎	顎顔面口腔外科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	清 水 志 保	顎顔面口腔外科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	山 田 茜	顎顔面口腔外科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	曾 我 麻里恵	歯科放射線科医員	継続
採用	29. 4. 1	小 林 太 一	歯科放射線科医員(パート)	継続
採用	29. 4. 1	高 村 真 貴	歯科放射線科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	金 丸 博 子	歯科麻酔科医員	継続
採用	29. 4. 1	小 玉 由 記	歯科麻酔科医員	継続
採用	29. 4. 1	須 田 有紀子	歯科麻酔科医員	新規

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	29. 4. 1	山崎 麻衣子	歯科麻酔科医員 (パート)	新規
採用	29. 4. 1	西田 洋平	歯科麻酔科レジデント (パート)	新規
採用	29. 4. 1	澤 味 規	小児歯科・障がい者歯科医員	医歯学系特任助教
採用	29. 4. 1	笹川 祐輝	小児歯科・障がい者歯科レジデント	新規
採用	29. 4. 1	小野寺 早紀	小児歯科・障がい者歯科レジデント	新規
採用	29. 4. 1	松枝 一成	小児歯科・障がい者歯科レジデント (パート)	新規
採用	29. 4. 1	鈴木 絢子	小児歯科・障がい者歯科レジデント (パート)	継続
採用	29. 4. 1	中島 努	小児歯科・障がい者歯科医員	新規
採用	29. 4. 1	大竹 正紀	矯正歯科医員	継続
採用	29. 4. 1	坂上 馨	矯正歯科医員	継続
採用	29. 4. 1	西野 和臣	矯正歯科医員	継続
採用	29. 4. 1	大倉 麻里子	矯正歯科医員	継続
採用	29. 4. 1	眞舘 幸平	矯正歯科医員 (パート)	新規
採用	29. 4. 1	上村 藍太郎	矯正歯科医員 (パート)	継続
採用	29. 4. 1	大森 裕子	矯正歯科医員 (パート)	継続
採用	29. 4. 1	阿部 遼	矯正歯科医員 (パート)	継続
採用	29. 4. 1	新島 綾子	矯正歯科医員 (パート)	継続
採用	29. 4. 1	村上 智子	矯正歯科医員 (パート)	継続
採用	29. 4. 1	中田 樹里	矯正歯科医員 (パート)	継続
採用	29. 4. 1	北見 公平	矯正歯科医員 (パート)	新規
採用	29. 4. 1	佐藤 知弥子	矯正歯科医員 (パート)	新規
採用	29. 4. 1	網谷 季莉子	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	29. 4. 1	市川 佳弥	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	29. 4. 1	藤田 瑛	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	29. 4. 1	栗原 加奈子	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	29. 4. 1	大澤 知朗	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	29. 4. 1	深町 直哉	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	29. 4. 1	水越 優	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	29. 4. 1	長崎 司	矯正歯科レジデント (パート)	新規
採用	29. 4. 1	工藤 武久	矯正歯科レジデント (パート)	新規
採用	29. 4. 1	皆川 久美子	予防歯科医員	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	29. 4. 1	宮 本 茜	予防歯科医員	継続
採用	29. 4. 1	野々村 絢 子	予防歯科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	渡 辺 真 光	予防歯科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	堀 水 慎	歯周病科医員	継続
採用	29. 4. 1	宮 澤 春 菜	歯周病科医員	継続
採用	29. 4. 1	中 島 麻由佳	歯周病科医員	新規
採用	29. 4. 1	松 田 由 実	歯周病科医員	新規
採用	29. 4. 1	佐 藤 圭 祐	歯周病科医員(パート)	継続
採用	29. 4. 1	根 津 新	歯周病科医員(パート)	継続
採用	29. 4. 1	保 苺 崇 大	歯周病科医員(パート)	継続
採用	29. 4. 1	黒 木 歩	歯周病科医員(パート)	継続
採用	29. 4. 1	山 田 実 生	歯周病科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	横 地 麻 衣	歯周病科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	山 崎 恭 子	歯周病科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	金 子 千 尋	歯周病科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	高見澤 圭	歯周病科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	日 吉 巧	歯周病科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	干 川 絵 美	歯周病科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	目 黒 史 也	歯周病科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	田 村 光	歯周病科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	都 野 隆 博	歯周病科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	松 岸 葵	歯周病科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	末 山 有希子	歯の診療科医員	新規
採用	29. 4. 1	枝 並 直 樹	歯の診療科医員	新規
採用	29. 4. 1	山 田 葵	歯の診療科レジデント	新規
採用	29. 4. 1	長谷川 泰 輔	歯の診療科医員(パート)	新規
採用	29. 4. 1	遠 間 愛 子	歯の診療科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	竹 内 亮 祐	歯の診療科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	鈴 木 裕 希	歯の診療科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	井 田 貴 子	冠・ブリッジ診療科医員	新規
採用	29. 4. 1	竹 内 陽 香	冠・ブリッジ診療科レジデント	新規

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	29. 4. 1	浜谷 桂 佑	冠・ブリッジ診療科レジデント	新規
採用	29. 4. 1	高 昇 将	冠・ブリッジ診療科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	高岡 由梨那	冠・ブリッジ診療科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	小飯塚 仁 美	義歯診療科医員	継続
採用	29. 4. 1	吉村 将 悟	義歯診療科レジデント	新規
採用	29. 4. 1	兒玉 匠 平	義歯診療科レジデント	新規
採用	29. 4. 1	大川 純 平	義歯診療科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	設 樂 仁 子	義歯診療科レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	菊 地 さつき	義歯診療科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	上 原 文 子	義歯診療科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	船 山 さおり	口腔リハビリテーション科医員	医歯学系特任助教
採用	29. 4. 1	鈴 木 拓	口腔リハビリテーション科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	吉 原 翠	口腔リハビリテーション科レジデント(パート)	継続
採用	29. 4. 1	長谷川 真 奈	歯科総合診療部医員	継続
採用	29. 4. 1	三 上 あずさ	歯科総合診療部医員	継続(育児休業中)
採用	29. 4. 1	日 吉 梨 乃	歯科総合診療部レジデント	新規
採用	29. 4. 1	小 松 万 記	歯科総合診療部レジデント	新規
採用	29. 4. 1	原 さやか	歯科総合診療部レジデント	新規
採用	29. 4. 1	中 村 太	歯科総合診療部医員(パート)	継続
採用	29. 4. 1	佐 藤 拓 実	歯科総合診療部医員(パート)	継続
配置換	29. 4. 1	前 川 和 也	摂食嚥下機能回復部医員	口腔リハビリテーション科レジデント
採用	29. 4. 1	那小屋 公 太	摂食嚥下機能回復部医員	新規
採用	29. 4. 1	高 嶋 真樹子	顎関節治療部医員	継続
採用	29. 4. 1	河 村 篤 志	顎関節治療部医員	継続
採用	29. 4. 1	山 崎 裕 太	顎関節治療部レジデント	継続
採用	29. 4. 1	永 井 康 介	顎関節治療部レジデント(パート)	新規
採用	29. 4. 1	山 田 一 穂	インプラント治療部医員	継続
採用	29. 4. 1	上 松 晃 也	インプラント治療部医員	継続
採用	29. 4. 1	今 井 秀 明	インプラント治療部医員	継続
採用	29. 4. 1	阿 部 達 也	病理検査室医員	継続
任期満了	29. 4. 30	八 卷 正 樹		矯正歯科講師

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
昇任	29. 5. 1	福井 忠雄	矯正歯科講師	医歯学系助教
採用	29. 5. 11	永田 量子	歯の診療科レジデント(パート)	新規
採用	29. 6. 1	中島 努	小児歯科・障がい者歯科助教	小児歯科・障がい者歯科医員
退職	29. 6. 30	眞舘 幸平	矯正歯科医員	矯正歯科医員(パート)
退職	29. 6. 30	阿部 達也	(医歯学系特任助教)	病理検査室医員

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	29. 4. 1	角田 麻未	看・東3階病棟看護師	特定有期雇用職員
採用	29. 4. 1	宮路 七瀬	看・東3階病棟看護師	特定有期雇用職員
採用	29. 4. 1	小林 愛夢	看・東3階病棟看護師	新規
採用	29. 4. 1	眞見 美里	看・東3階病棟看護師	新規
採用	29. 4. 1	若月 彩貴	看・東3階病棟看護師	新規
所属換	29. 4. 1	蝶名林 文子	看・入退院センター副看護師長	看・東3階病棟副看護師長
所属換	29. 4. 1	新目 美和子	看・東3階病棟看護師	看・外来4・5階看護師
所属換	29. 4. 1	津田 典子	看・東3階病棟看護師	看・集中治療部看護師
所属換	29. 4. 1	小林 悠里	看・西7階病棟看護師	看・東3階病棟看護師
育児休業復帰	29. 4. 1	伊藤 麻衣		看・外来4・5階看護師
所属換	29. 4. 1	伊藤 麻衣	看・外来2・3階看護師	看・外来4・5階看護師
採用	29. 4. 1	坂本 裕里子	歯科衛生部門歯科衛生士	新規
採用	29. 4. 1	牧口 由依	歯科衛生部門歯科衛生士	新規
採用	29. 4. 1	木下 優奈	歯科衛生部門歯科衛生士	新規
採用	29. 4. 1	横山 奈央	歯科衛生部門歯科衛生士	新規
採用	29. 4. 1	小島 千奈美	歯科衛生部門歯科衛生士	新規
育児休業復帰	29. 4. 17	立川 友季子		看・西7階病棟看護師
所属換	29. 4. 17	立川 友季子	看・外来4・5階看護師	看・西7階病棟看護師
育児休業	29. 4. 22	能瀬 美鈴		看・外来4・5階看護師
育児休業	29. 4. 28	本間 美貴		看・東3階病棟看護師
任期満了	29. 5. 31	土田 麻衣子		歯科衛生部門歯科衛生士

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	29. 4. 1	藤 江 進	事務部長	大阪大学医学部附属病院総務課長
配置換	29. 4. 1	吉 澤 初 記	学務部長	事務部長
昇任	29. 4. 1	清 水 紀 之	経営企画課課長	経営企画課副課長
配置換	29. 4. 1	岩 田 尚 志	学務部留学交流推進課専門職員	総務課総務係長
配置換	29. 4. 1	長 橋 崇 之	総務部企画課専門職員	総務課人事企画係長
配置換	29. 4. 1	小 嶋 貴 幸	総務部総務課法規係長	総務課地域医療推進係長
配置換	29. 4. 1	丸 山 浩 一	学術情報部情報企画課情報企画係長	経営企画課経営分析係長
配置換	29. 4. 1	渋 谷 孝 巳	経営企画課副課長	医事課専門員 (医療福祉) (医療福祉支援室長)
配置換	29. 4. 1	吉 田 恵太郎	医事課専門員 (医療福祉担当) (医療福祉支援室長) (患者支援係長兼務)	医歯学系総務課副課長 (歯学部事務室長)
配置換	29. 4. 1	目 黒 恵 美	医事課審査係長	医事課医療安全係長
配置換	29. 4. 1	松 岡 清 美	総務課総務係長	研究企画推進部産学連携課地域連携係長
配置換	29. 4. 1	矢野目 健	総務課人事係長	総務課人事労務係長
昇任	29. 4. 1	小 黒 健 児	総務課副課長 (地域医療推進係長兼務)	総務部総務課総務係長
昇任	29. 4. 1	長谷川 亨	経営企画課副課長 (経営分析室長) (経営分析係長兼務)	医事課審査係長
昇任	29. 4. 1	杉 野 ゆかり	医事課医療安全係長	管理運営課 (契約係) 主任
命	29. 4. 1	田 澤 由紀子	医事課診療請求係長兼務	医事課専門職員
命	29. 4. 1	泉 井 文 男	総務課職員係長兼務	総務課副課長

平成29年度歯学部内委員会

平成29年 4月 1日

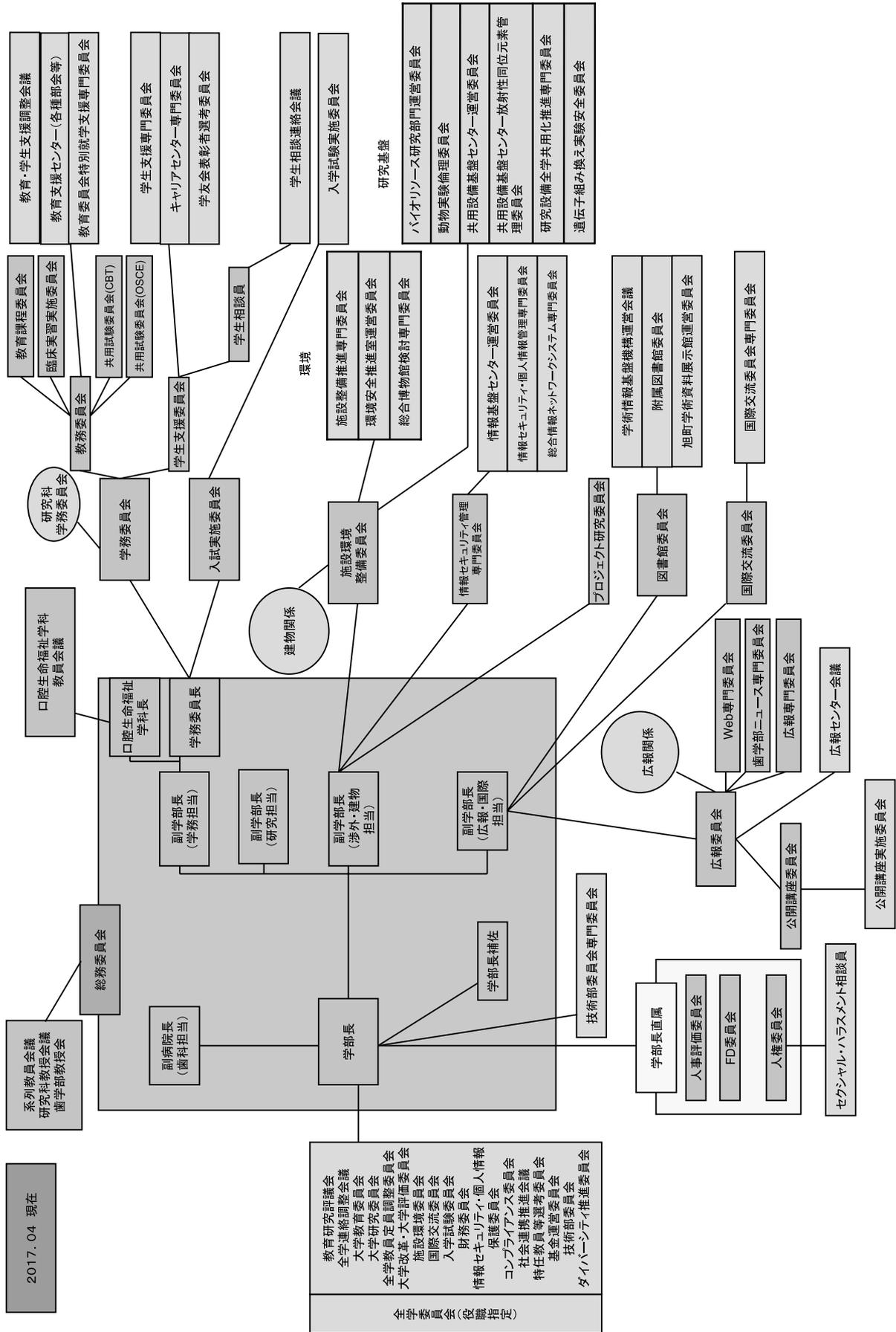
委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
—	前田 健康	系列長		任期 28.4.1~31.3.31
総務委員会	前田 健康	歯学部長		総括
	小林 正治	副病院長		歯科担当
	小野 和宏	副学部長・学務委員会委員長		学務
	魚島 勝美	副学部長		広報・国際
	寺尾 豊	副学部長		研究
	小野 高裕	副学部長		渉外・建物
	宮崎 秀夫	副学部長・歯学科長		
	葎原 明弘	口腔生命福祉学科学科長		
大内 章嗣	学部長補佐			
学務委員会	小野 和宏	学務委員会委員長	全学教育委員会	総括
	齋藤 功	教務委員長		教務
	瀬尾 憲司	入試委員会委員長	入試実施委	入試
	山村 健介	学生支援委員会委員長		学生支援
	藤井 規孝	臨床実習委員会委員長		臨床実習
教務委員会	葎原 明弘	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
	齋藤 功	教務委員会委員長		総括
	片桐 涉			
	大内 章嗣			教育課程(口腔生命福祉学科系)
	ステガロク・ロクサーナ			教育課程(口腔生命福祉学科系)
	井上 誠			◎共用試験(CBT)
	中島 貴子			◎共用試験(OSCE)
小野 和宏	オブザーバー			
教育課程委員会	齋藤 功			
	小野 和宏			
	井上 誠			
臨床実習実施委員会	藤井 規孝	委員長		
	辻村 恭憲	48期ヘッドインストラクター		
	竹中 彰治	歯の診療科		
	大墨 竜也	歯の診療科		
	杉田 典子	歯周病科		
	両角 俊哉	歯周病科		
	五十嵐 直子	義歯診療科		
	藤原 茂弘	義歯診療科		
	秋葉 奈美	冠・ブリッジ診療科		
	小田 陽平	口腔再建外科		
	勝見 祐二	顎顔面口腔外科		
	小山 貴寛	顎顔面口腔外科		
	丸山 智	口腔病理検査室		
	池 真樹子	歯科放射線科		
	勝 良剛	歯科放射線科		
	中島 貴子	歯科総合診療部		
	遠藤 千佳	看護部門		
	高野 綾子	歯科衛生部門		
	照光 真	歯科麻酔科		
	倉田 行伸	歯科麻酔科		
	多田 紗弥夏	予防歯科		
	山賀 孝之	予防歯科		
	辻 光順	口腔リハビリテーション科		
	伊藤 加代子	口腔リハビリテーション科		
	大島 邦子	小児・障がい者歯科		
	岩瀬 陽子	小児・障がい者歯科		
	竹山 雅規	矯正歯科		
	丹原 惇	矯正歯科		
	高橋 功次朗	矯正歯科		
	福島 正義	口腔生命福祉学科		
	富井 優子	看護部門		
田代 美佐子	看護部門			
大 湊 麗	言語治療室			

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
	井浦敏彦	歯科撮影室		
	羽田野政義	歯科撮影室		
	荒井良明	顎関節治療部		
	星名秀行	インプラント治療部		
	真柄仁	摂食嚥下機能回復部		
	八木稔	お口の健康室		
	中島貴子	歯科総合診療部		
	坂本富美子	歯科外来手術室		
	後藤早苗	歯科衛生部門		
	柴田佐都子	口腔生命福祉学科		
	小田島あゆ子	口腔生命福祉学科		
	本間和代	明倫短期大学		
	計良倫子	明倫短期大学		
	小野真奈美	明倫短期大学		
共用試験委員会 (CBT)	井上誠			必要な都度委員を指名
共用試験委員会 (OSCE)	中島貴子			必要な都度委員を指名
学生支援委員会	山村健介	学生支援委員会委員長	学生相談室相談員・学生相談連絡会議	総括
	依田浩子			歯学科
	小松康高			歯学科
	秋葉奈美			歯学科
	小田島あゆ子			口腔生命福祉学科
	佐伯万騎男		学生相談室相談員・学生相談連絡会議	歯学部
	伊藤晴江			研究科
学生相談員	山村健介			全学の学生相談室相談員・学生相談連絡会議は、井上教授、程准教授
	依田浩子			
入試実施委員会	瀬尾憲司	入試委員会委員長	入試委・入試実施委	総括
	泉健次	前入試委員会委員長		補佐
	高橋英樹			
	野杵由一郎	オブザーバー		
研究科学務委員会	齋藤功			総括
	葭原明弘			教務
	井上誠			学生支援
施設環境整備委員会	宮崎秀夫	副学部長		総括
	佐伯万騎男		施設整備専門委	
	吉江弘正		総合博物館検討専門委	
	大峽淳		動物実験倫理委員会	
	寺尾豊		遺伝子組換え実験安全委	
	福島正義		口腔生命福祉学科(施設担当)	
共通施設専門委員会	宮崎秀夫	副学部長		
情報セキュリティ管理専門委員会	西山秀昌		情報基盤センター運営委	総括
	鈴木一郎			IT一般
	中島俊一			
	小田陽平			
図書館委員会	魚島勝美	副学部長		
	吉江弘正		附属図書館委員会	
	八木稔		附属図書館委員会	
国際交流委員会	魚島勝美	副学部長		
	泉健次			
	齋藤功			
	依田浩子			
	大峽淳			
	長澤麻沙子			
	柿原嘉人			
	石田陽子	オブザーバー		
広報委員会	魚島勝美	副学部長	歯学部ニュース専門委	総括
	大島勇人		研究科広報委web担当	◎
	小田陽平		学部広報web専門委	◎
	スガコク・ロクサーナ		広報委員会(学部)	◎
	吉羽邦彦		広報委員会(研究科)	◎
	黒川孝一		口腔生命福祉学科	◎
	辻村恭憲		公開講座実施委員会	◎

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
研究科広報委員会 (Web担当)	大島 勇人			◎
	鈴木 一郎			◎
歯学部広報委員会 Web専門委員会	黒川 孝一			◎
	小田 陽平			
	照光 真			
歯学部ニュース専門委員会	魚島 勝美			他の委員は准講員、助教層からローテーションで選出
	広報専門委員会	スチガロウ・ロクサーナ	学部	
	吉羽 邦彦		研究科	
歯学部公開講座委員会	辻村 恭憲		公開講座実施委員会	
プロジェクト研究委員会	寺尾 豊	副学部長		
	小野 高裕			
	大峽 淳			
	泉 健次			
	片桐 渉			
	前川 知樹			
臨床系実習室管理委員会	小野 高裕	共同技工室、実習準備室		
	吉羽 永子	臨床基礎実習室、臨床技能評価室、臨床示説室		
	小林 哲夫	臨床基礎実習室		
	魚島 勝美	臨床基礎技能実習室		
	秋葉 奈美	臨床技能自習室		
	藤井 規孝	臨床実習技工室		
	黒川 孝一	歯科行動科学相互実習室		
人事評価委員会	前田 健康	系列長		
	山村 健介	任期制教員で基礎系の教授		任期 28.4.1～30.3.31
	林 孝文	任期制教員で臨床系の教授		任期 28.4.1～30.3.31
	小田 陽平	任期制教員である准教授、講師及び助教のうちから2人		任期 28.4.1～30.3.31
	土門 久哲			任期 28.4.1～30.3.31
FD委員会	秋葉 陽介	委員長		
	佐伯 万騎男			
	寺尾 豊			
	池 真樹子			
	真柄 仁			
	伊藤 晴江			
	吉羽 永子			
	新美 奏恵			
	藤原 茂弘			
	前田 健康	顧問		
	小野 和宏	オブザーバー		
	井上 誠	オブザーバー		

臨床実習実施委員会以外で任期の記載のない委員会委員の任期は、平成28年4月1日から平成30年3月31日まで
◎は下部組織を立ち上げる必要のある委員

《歯学部各種委員会》



歯学部ニュース

平成29年度第1号（通算131号）

発行日	平成29年9月30日
発行者	新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者	大川 成剛、魚島 勝美
編集委員	岩瀬 陽子、大倉 直人 金子 昇、三上 俊彦
印刷所	(株)ウイザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮 影 地：西蒲原郡弥彦村（弥彦公園）

撮 影 日：2017年 8 月

使用機材：OLYMPUS E-M 5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／絞り：F 4（開放）・シャッター速度：60分の 1 秒

裏表紙の撮影データ

撮 影 地：東京都墨田区（東京スカイツリー）

撮 影 日：2017年 8 月

使用機材：OLYMPUS E-P 5 / M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0／絞り：F 2（開放）・シャッター速度：40分の 1 秒

コメント：今回は夕景色の写真でまとめてみました。機材の進歩により、日が落ちてからでも手持ち撮影で手ぶれが目立たないようになってきました。表紙では竹筒の中でゆらめくろうそくの炎でアナログ的な穏やかな光を、裏表紙では彩り豊かな都市の照明でデジタル的な鮮鋭な光を表現してみました。表紙の写真では、多くの笑顔と会っているような気がします。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：OLYMPUS E-M 5 Mark II, E-P 5

レ ン ズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0

撮 影 者：林 孝文

